
心の情景

星桜なつき。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の情景

【Zコード】

Z0112F

【作者名】

星桜なつき。

【あらすじ】

絵に描かれた女の子を好きになつた男の子。 そんな彼の前に一人の女の子が現れる。

プロローグ

『どうしたの?』

(ん? ああ。とささき俺、自分が嫌になる事があつて)
『どうして?』

(だつてどうだろ? 俺は君にしかこうして心を開いていない)
『そんなことないよ。わたしだけじゃなく、あなたには友達がいる』

(そうだな。でも、その友達には今までの俺でいたいんだよ。だから俺はこうして君と話をする。こんな話は君にしかできない』とな
んだ。そして俺は、今までの気持ちを持つていていいんだよ)
『今のあなたと、昔のあなたではちがつのか?』

(ちがう……かもしだれない)

『うん。それなら大丈夫だよ』

(どうして?)

『ひとは変わらないと生きていけないものでしょ? ずっと同じま
だなんて、それはそのひとにとつてもつまらないことじやないのか
な。だけどあなたはいいほうに変わってきてると思う。だから、
大丈夫』

(そうかな)

『うん。だつて、あなたは以前よりも周囲のことに気を使つようにな
つてるよ。迷惑をかけなによつて』

(ああ……そうかもしだれない)

『うん。だからすくなくとも、そう考えてあなたは今を生きている
のでしょ? わたしをこうして見つめてくれて。だから大丈夫。あな
たは、それくらいがんばっているもの。だつて、わたしはいつもあ
なたを見ているんだから』

(そうだな。俺はなんとか頑張つているんだよな、リサ……)

俺の両親が亡くなつた。

俺がその時その場所にいる事ができれば、実感として沸いたのかもしれない。でも実際、目の前にある一人を見た時は実感が湧かなかつた。初めて鏡を見せられて、これがあなたなんだよ、と言われた時の気持ちに似ていた。それが自分なんだってわかるのに、自分の思つていた映像とかけ離れていて、それを見ている自分の現実に納得できない。

他人から聞かされた情報なんてそんなものだ。

なにしろ、俺がこの目でそうなつたコトをみていないのだから、みんなして俺にタチの悪い冗談を見せているくらいの認識だつた。いや、きっとその時の俺は、これからのこと想像するに容易なコトを、認めたくなかったんだな。

これが実際に起こつてゐることなんだつて、認めたくなかったんだ。

だから、それが来たのは、ずいぶん経つてからの事だ。

あの時に他人達から聞かされた、憐憫の言葉の意味。

いつも行く学校も、俺の友人達も、今までとなにも変わらずに俺に振舞つてくれる。今までと変わらない毎日は続いていく。

俺を取り巻く外の環境 外見は何も変わつてない。

その俺の外見を見たとき、どうしようもないほどの、どこにも向けられない、終わる事のない、むなしさと、寂しさと、心細さがあることを知つたのだ。

ここでの俺は、一人だけ。

とりあえずの何かしらの目標……、心を始めとしていろんなことの支えとしてくれていた両親。それがもう、いないのだという現実。そのことを知り、じわりじわりと俺の心を蝕み、胸をかきむしりたくなるような後悔に似た感情。

これが、絶望というやつなのだらう。それを嫌といつほど感じてしまつた。

だけど、この俺を取り巻く外の環境だけは変わらずにそのまま続けたかった。このむなしさと寂しさと心細さを外見にぶちまけ、俺を取り巻くこの外の世界まで壊したくなかった。

今の俺は、昔の俺のまま認識してくれる世界に俺はまだ頼りたいのだ。

でも、両親が亡くなってしまった前の自分と同じようには、もう振舞うことはとても困難に思えた。

例え無理をするにしても、そこまで器用にすぐ自分を変えることなんて俺にはできるわけがないのだ。

だから、なにか一つでも、新しいものを見つけ出したかった。見つけ出して、ここの人でいる世界からの現実逃避する理由を作ろうとしたかった。現実逃避して、俺の気持ちを外見に現させないようとしたかったのだ。

いや、現実逃避じゃない。俺はきっと、なにかにすがりたいのだと思う。これから自分の目標になるようなものを見つけて、それをずっと目指しつづけたいのだ。

そうでもしないと、この寂寥感をぬぐえなく、これから一人で生きていけない。そう思つたのだ。

だから、探した。

俺の知らない、まだ聞いたこともなかつた、両親が俺に望んでいたようなことを。

それは、両親の本意じやなくてもいいのだ。

ただ、俺は今これにがんばつてているのだから、大丈夫だと、自分自身に納得させたかつただけなのだ。

そんなときだ。

俺にこの道を歩ませるきっかけを見つけたのは。

それは、家の奥にあつた、ほこりだらけの倉庫の奥で見つけた。半ばゴミのようながらくたの中にうもれていた、茶色い布に包まれた1枚の四角い板。

ほこりだらけのその布から出てきたものは、学校で使つてゐる机

くらいの大きさの、一枚のキャンバスだった。

そのキャンバスに描かれていた絵を見て、俺はとても驚いた。

俺はしばらく、その女の子に見惚れてしまっていた。

妖精か？ それとも女神？

とても美しい女の子が、そこにいた。

茶色の丸い大きな帽子をかぶり、そこから流れる長い黒曜石を溶かしたような黒髪がよく目に映る。風になびいているむらむらの髪は輝いて、闇夜に輝く天の川のようだ。

横を向き、遠くの景色を見つめているその瞳の虹彩は、春の生き生きとした木々の葉を思わせる深い緑。どこか遠くを見つめているのに、俺を見ているような気もしてくる。とても優しくて、こうして見ている俺に、全てを任せきつた、安心したような笑顔をみせていた。その美しい緑のなかに、俺は吸い込まれていくようだつた。

季節は冬、だろ？ バックは淡いグレーの雲に覆われて、彼女の周りには白く煙るような雪が舞つている。暖かそうなチェックのマフラーを巻き、その雪にも負けないほど白い肌の小さな指は、風で舞いそうな帽子をそっとおさえていた。

年齢は今の俺と同じくらいか。少女のあどけなさが残っているのに、女性の燐とした美しさも兼ねそろえていた。

『risa』

そのキャンバスの右隅に、その文字があつた。

（リサ……？）

それが、これから俺を教えてくれた、この絵の女の子、リサとの出逢いだった。

「おーい、大樹。帰ろーぜー」

「ん、ああ、胡太郎。ちょっと待つてな」

4月も半ばに入り、暖かな春の日差しから襲つてくる睡魔と闘つ
授業が終わつた今日の放課後。

俺はいつものように自分の席に座り一枚の絵を見つめていた。

そこに俺の親友、『吾妻胡太郎』が声をかけてきた。

「なんだよ大樹。まだ帰り支度もしてないじゃないか。もう誰もい
ないぞ。さつさと行こうぜ。こんな所にいてもつまらん」

「ああ、そうか。もう誰もいないのか」

そう言われてあたりを見ると他のクラスの連中は誰もいなくなつ
ていた。俺は絵を見ながら物思いにふけつていたので、周りの様子
はわからなかつた。

授業が終わつてもうずいぶん経つていたし。

「大樹。なんだよ、まだその絵を見ていたのか?」

「ん? ああ

「あれからずつと見ていたのか? よく飽きないな

「ああ。惚れているからな」

俺が見ていたのは、あの時見つけた 黒い髪、緑の虹彩を持つ
女の子 リサの絵だ。俺はこうしていつもあの絵を小さく写した
物を持ち歩いて、暇さえあれば見つめていた。

リサを見つめていると、俺の心の中でリサと話をしているような
感覚が生まれて、励まされたような気持ちになつてくる。おかげで
俺の寂しさを紛らわす事ができていた。さっきもそんなふうに物思
いの中で話をしていた。

このリサの絵の事を知っているのは胡太郎だけ。胡太郎とは幼な
じみで俺のことをよく知ってくれている。その為、俺のこんな変な
性癖もある程度は許容してくれているようだ。

「それにしても大樹。そんな絵の中にいる現実にいない女の子に恋するなんてなあ。俺には青春を無駄にしているようにしか思えんぞ」

「やうか？」

「やうだ。まあ、確かに、その絵の女の子はかわいいぞ。でもな、健全な男だったら、実際の女の子にアタックするべきだ。女の子はいいぞー。柔らかいし、あつたかいし。それになによりきもちいい。しかも絵の女の子とは違つていろいろとしゃべつてもくれるぞ。どうだ？ そんな絵なんか捨てて実際の彼女でも作つたら。願つてもかなわない事に時間をかけるなんて全くの無駄だぞ」

まあ、許容してくれていると言つても、こんな「冗談めいたからかいの対象にはするが。

「お前はそはいうけどな、リサだつて、色々話をしてくれる」「話す？」

「ああ。話してくれる。リサを見ているだけで、俺とリサは心の中で会話できるんだ」

「へえ。どんな？ 具体的に説明してみろよ」

「うーん、説明するのはちょっと難しいな。俺が何か言つとそれに相槌をうつというか、アドバイスをくれたりとかだな」

「ああ、そうかい。でもそんなこと、お前を知らないヤツが聞いたらおかしいやつだと思われるぞ」

「そんなことは百も承知さ。いいんだ。リサがいてくれるのなら」「はー、いくら言つてもわかつてくれないなー。まあ、いいか。絵を見ているだけなら誰も損はしない」

「ところで胡太郎、今日は女の子の方はいいのか？」

「なんだよ。もう忘れたのか？ 俺は今日もさつきこ組の渡辺に誘われたのだけど、お前のたまにある部活の休みのときくらいはお前とだべつてもいいと思つたから、誘つたんじやないか

「あ、そうか」

胡太郎は結構見てくれが良いので、クラスの内外問わず女子達によくもてている。昔はよく遊んだものだが、今では俺と遊びに行く

なんて稀になつていった。

それでも、こうしてたまに誘つて遊びに出かけたりはする。

「まったく、大樹は友達がいのないやつだ。せつかく面白い情報も教えてやろうと思ったのにわ」

「わかつたよ、帰ろう」

「よし、親友。それでは、いつもの所に参りましょつか」

俺はリサの絵を胸のポケットにしまい、帰り支度をした。

こうして、いつもの商店街でゲーセンやら、CD屋やら、色々な所を胡太郎とぶらつくことになった。

いつも思うのだが、胡太郎は俺のような男とこうして街を歩くのは嫌じやないのだろうか。せつかく女の子といつしょにいられるのならそうすればいいと思つたが。

そう訊くと胡太郎は、

「ああ、そんなこと決まつていて。女の子と街を歩くときは、基本的に女の子にあわせないとダメだろ？だから男と一緒にいる時の子を連れて行けないような俺の好きな所にいけるからいいんだ。大樹だと変に気を使うこともなく何処にでもいけるし、これはこれで別の楽しみがあるぞ」

と言つた。

まあ、どんな理由であれ、いつものよつこいつして胡太郎と「冗談やからかい合ひをするだけでも、俺にとつてはありがたいことだつた。

多分、口では言わないけれど、俺のがそう思つていてることを知つていてそうしてくれているのだろう。胡太郎はそういうやつだ。

だから、女の子にももてるのだろうな。

「で、胡太郎、さつき何か面白い情報があるとか言つていなかつたか？」

「あ、そうだ、忘れてた。森村君。これはなかなかいい情報だぞ」

「なんだよ」

「今度転校生が来るんだつてさ。うちのクラスに」

「転校生？」

「しかも女の子だつて言ひはなしだ」

「ふーん」

さすがに胡太郎は「ううう話にはめぞとー」。

「そこで、さつきの話になるわけだ」

「さつきの話？」

「お前が彼女を作る、だ」

「なんで？」

「転校生、しかも女の子ときたらかわいいに決まつている。そんな女の子を放つておくなんて手は無い」

「だから、なんで俺なんだよ……」

「ドラマチックで面白そうじやないか。転校してきたヒロインが主人公の隣の席になつて、初めての学校に不安になるヒロインに主人公は優しく声をかけて、そのうちに一人は恋に落ちて……。かー。いいシチュエーションじやないか、まったく。男となつたからには学園生活に是非一度はそんなシチュエーションを味わつてみたいと思わないか？」

「はいはい。女の子の事は胡太郎に任せるとよ」

「何を言つてゐるんだ。お前は結構見てくれ　容姿は悪くない。

だからクラスの女子もお前の事は悪く思つていらないんだぞ。真面目で一生懸命なお前はむしろ好意的にも思われてゐる。まあ、俺には遠く及ばないけどな。だから、そんなことを言つて、チャンスを逃さないようにならよ。そうしたチャンスは有効に使わないとダメだぞ、森村君」

「チャンスを有効に使えと言つ言葉には賛成だけど、俺に彼女、恋人はいいよ。女の子が俺のことをどう思つてゐるかとかはともかく、俺から女の子に話しかけることなんて恥ずかしくてとてもできない。俺に彼女をつくるなんて無理だ。だから俺にはリサがいてくれればいい。それに今はこれから将来の事で頭がいっぱいです。他の事までは頭が回らないよ」

「うう、俺は女の子に対する少し苦手意識がある。それは胡太郎にも話せないようなことなのだ。

「将来の事？ああ、そうか。お前は絵の才能があつたから、その道を目指すつて言つていたな」

「ああ。今度近いうちに特待生を選ぶコンクールみたいなものがあるんだ。そこでがんばつて、俺もこのリサのような絵を描いてみたいんだ。そして……」

「そつか。頑張れよ。恋人ができればその子の為に、夢に向かう努力も万倍にもなるだろうし、ナ」

胡太郎は俺の肩を叩きながら囁く。

まつたく。冗談なんだか、本気なんだか。

「胡太郎はどうするんだ？そろそろ進路、考えないといけない頃だろ？」

「俺か？どうだらうなあ……」

「女の子に手を出すは良いけど、俺はそっちの方が心配だ。まあ、胡太郎は頭がよくて成績もいいけど。素行とかで目をつけられているんじゃないのか？」

「ふふん。俺はその気になつたらホストにでもなるからいいのさ」「ホスト？あ、そうか、その手があつたか。胡太郎にはぴつたりだな。天職だ」

「つて、おい、本気にしないでくれよ」

「なんだ、違うのか」

「ああ、もうわかつたよ。大樹の言つように俺はホストを目指す。たくさんの女の子を幸せにできるからやりがいのある仕事だしな。よし、指名度ナンバー1は俺のものだ」

胡太郎はそう言いながらシニカルな笑顔をして親指をひとつ立てた。

「ああ、頑張つてな」

「大樹もな」

きつと胡太郎は俺のことが心配なのだらう。

胡太郎の経験からして、俺に女の子がいれば俺も少しは寂しくなるだろうなんて思つてくれているのかもしれない。

でも、案外、こんなオクテな俺に彼女ができるのを楽しみに見ているだけなのかもしれない。そんな俺を見てからかいの対象にしたいだけなのかもしれない。

そういうヤツなんだ、胡太郎は。
でも、ありがとうな、胡太郎。

「ただいま……」

胡太郎と別れて、誰もいない、冷たく暗い静かな家に帰る。

学生の一人暮らしだと言えば聞こえがいいだろう。例え両親と離れて暮らしたいと思う奴がいても、本気で両親がいなくなってしまえばいいなんて思うことは多分、ないはずだ。

俺の両親は、一年くらい前、事故で亡くなった。

なんでも、俺がいないときに一人でドライブ中、居眠り運転のトラブルに正面衝突されたとか。

即死だったらしい。

そのことを知らされたときは、両親が亡くなつたとこに実感が持てなかつた。

両親はさすがに俺より早く亡くなつてしまつとは思つが、こうも突然に、しかも両親が一緒になんてとても現実で起こつていいことだなんて、にわかに信じられなかつたのだ。

いや、信じたくなかった。認めたくなかつた。

両親が死んでしまつたと実感が出てきたのは、一人で生活するようになつてしまふしてからだ。

誰もいない、いつもいるこの家の、リビングルームや、台所、寝室……。

広くて、部屋がたくさんある家に、一人きり。

「」と毎日向かい合っていたら、もつ両親に会える事はないんだ
と、日に日に辛くなつていた。

でも、「」から出ると、外にはいつもの俺の世界がある。その世界まではなくしたくなかった。そこは唯一、俺の存在を認めてくれる世界だったから。

だから、ここにある俺の辛い心から出た嫌な気持ちから、外の世界を壊してしまつ」とのなによつに、なにか心の支えが欲しかったのだ。

そして、あの日を境にようやく俺は日常を取り戻していくことができてきた。

一つのことを目指し、集中する事で、忘れる」とは出来なくとも、考えないようにはすることはできるようになつてきたのだ。

「それも、リサのおかげ、といつわけだな」

あの日見つけたキャンバスを眺める。

このキャンバスに描かれた女の子を見つけて以来、俺はいつかこんな美しい絵を描いてみたいという一心で、それまで少し興味のあつた絵の世界に足を踏み入れ始めたのだ。

描き始めると、思つた以上に絵を描く事は面白かった。何とかという小さなコンクールに度々入賞したりとか、美術の先生に讃められたりとかして、今はわりと順調だった。

でも、まだまだリサのような絵は描けない。けれど、いつかきっと描ける日がくるかもしれない。

だから俺は、描きつづけていられる。

夢を見て、目標に向かって。

「俺、頑張るからな。見ていてくれ」
リサに弦くように。

絵の中のリサはいつもと同じ表情。

俺はすつと同じ綺麗なりサの瞳を眺めていた。

そうしていると、

『うん、がんばってね。大樹ならできるよ』

そんな、リサの声が聞こえてくる。

なんだか心が温かく、じんわりしていく。

この子を抱きしめたい……。

ぎゅっと抱いて……リサのぬくもりを感じたい……。

そうすると俺は、この嫌な一人きりな現実を、一瞬だけ忘れることができる……。

「リサ……。ありがとう」

リサをずっと見つめて。

時を忘れたように、見つづけていた。

「……」

ふと我に返る。

あたりは薄暗い、静かな部屋。

「ふう……。また、明日」

我に返つて、絵をしまおうと、もう一度、リサを見る。

ふと、思った。

もし、この女の子が実際にいたとしたら……。

絵なんだ。実際のモデルがいるかもしない。現実にいたリサをみて、作者はこの絵を描いたのかも知れない。

この絵が描かれたのは何年も昔だと思うけど、リサのモデルの人はまだどこかにいるのかもしれない。

「……」

違う。

本当は、俺、リサが実際にいて欲しいと願っているんだ。

俺はリサのような絵を描きたいんじやなくて、リサのような人が実際に現れてくれるることを願っているんだ。

この絵という接点から、いつかリサのモデルの人との接点に繋がると思つて、絵を描き始めたんだと、思う。

もし、実際にリサが俺の目の前に現れたら、俺は……。

いや、そんなことあるはずないよな。

こんな綺麗な緑色の虹彩を持つ人なんて、いるはずがないのだから

俺はせつとりサをしまい、自分の現実に目を向けた。

淡い白い闇の世界。

目を凝らしても、遠くが見えない。

ただ明るい白い闇。

ここはどこだろう。

白い闇の中で俺は一人きり。

なんだか、寂しいな。

他の人は……いないのだろうか。

「くすん……。くすん……」

どこかで、子供が泣いている声がする。

「くすん……。くすん……」

どこだらう。あたりは何も見えない。

「なんだおまえ、へんなめをしちやつてわ」

「くすん、くすん……」

「なけばなんとかなるとおもつているのか」

泣き声とともに小さな男の子の声が複数する。

どこだ……。何処にいるんだ?

「やめろよ。おまえ」

目を凝らしてみたら、目の前に、数人の子供がいた。

小さな女の子が屈んで真ん中にしゃがみこんでいる。

それをとりまくように数人の男の子がいた。

そこに、ひとりの囮んでいる男の子たちと同年齢の男の子が出てきた。

「なんだよ。おまえは」

「なんにもでひとりのおんなのこをいじめるなんて、かつこわる
いぞ」

「なんだよ、おまえはこいつのなかまか
「ちがうわ。でも、いまからなかもだ」

「こいつ

「ここのかよ。おまえたちがやつていたことをせんせこここにつけてやるぞ」

「せんせいにいわないとなんにもできないのかよ」

「いわれておこられるようなことをしてこるのかよ。せんせここいわれたらおかあさんにもいわれておこられるぞ」

「おい……」

「ふん。おぼえてこらるよ」

「ばーか」

女の子を囲んでいた男の子達が、持っていた棒を男の子になげつけ、逃げていく。

「ばかはおまえらだるー」

男の子は逃げていく男の子達に言葉を返して、かがんでいた女子に近づく。

「くすん、くすん……」

「だいじょうぶか? けがはないか?」

「くすん……」

「すこしふくがよ! れちゃつてゐ……。ねえ、だいじょうぶ?」

「くすん……」

男の子はそのまま泣いている女の子を見ていた。

「もへ、だいじょうぶだ。おれはあいつらのよつなことさせしないからな

「ほんと……」

女の子が男の方を向く。

「ああ」

「ありがとわ……」

男の子に向けた女の子の瞳は綺麗な緑色をしていた。

「あ」

「えつ……」

「おまえのめ、みどりいろなんだな」

「うん……」

「こんなきれいなめをみたの、おれ、はじめてだよ」

「えつ……？」

「す」「こ」な。なあ、おれとともにだけになつてよ」

「えつ……ともだち……？」

「ああ。せんなめのひとと、ともだちだなんじ、かつてここ」

「ほんと……」

「ああ。おれはおまえがおんなのじだからって、やべつしたりしないぞ」

「ほんとひし」

「ああ。たてる？」

「うん……」

男の子の差し出した手を取りながら、女の子せせ立上がる。
「えつと、なまえをおしゃってくれるかな。おれのなまえは……」
でも、緑色の瞳の女の子つて……？
この子はもしかして……。

一瞬何か思い当たるよつな」と思ひ出しかけた。

ふと、俺はそこで、田を覚ました。

そのとき、その思い当たるよつな気持ひを忘れてしまつた。
なんだつたんだひ。今の夢は……。

胡太郎の言つていた転校生はいきなり今日やつて來た。

「えー、皆ももう知つてゐるよつに、今日からこのクラスに転入になる生徒だ」

先生の隣に、俯いて所在なげな女の子が立つていた。

大きめの黒ぶち眼鏡をかけた、肩くらいの黒髪の女の子。俯いているからか？ クラスの女子達よりもやや小柄に見える。

おとなしく、地味な感じを受けた女の子だった。

「『霧沢美裕』です」

声も容姿に似つかわしく儂げだ。声は小さくて、かすかに一番後ろの席にいる俺のところにまで聞こえるくらいだった。

「えー、こんな時期だけど、皆、仲良くやるよつ」

女の子といふことで期待していた男どもがいたようだが、そいつらを見てみると、当てが外れた、みたいな表情をしていた。興味をなくしたようだ。

俺から見ると、そんなに悪くはないと思つけどな。

「一番後ろの窓際の席が君の席だ」

「はい」

一番後ろの窓際？ つて、俺の左隣じゃないか。空席だつたけど、なんてお決まりな設定なんだ。

あ、そうか。やつとわかつた。きっと胡太郎のことだ。ここまで知つていたのかもしれない。だからあえて俺にあんな話をしたのだ

うづ。

俺の席から右に桂馬に飛んだ位置にいる胡太郎を見てみると、俺に向かつてぴつと親指を立て、真面目そうな顔をして俺に、『そうだ』と言つよつに頷いていた。

やつぱりか。

俺の隣では、俯いて肩を落としながらつさの女の子が席につく。

「この女の子の名前は確か、霧沢さんと言つたな。

席についた霧沢さんを見ていると、霧沢さんのせりせりした黒髪が窓の光に溶けてきらきらと輝いていた。光に溶けてもその色は薄まる事がないほど漆黒だ。」「うこうのを緑の黒髪というのか？クラスの他の女子達は髪を染めていたりしている子が多いので、これほどの黒髪を見るのは新鮮だつた。

リサの髪は、実際だとこんな感じなのかもしれない。霧沢さんの瞳は緑ではなく、髪と同じ漆黒だつたけど。

「ああ、でも、綺麗な髪だな……。

「あー、それでは授業を始める……」

先生の眠くなりそうな声を聴いて、我に返つた。
霧沢さんの髪に、女子に見惚れていたなんて……。胡太郎をばかに出来ないな。

俺は少しだけばつが悪いような気持ちになつて、あたまをかきながら授業に集中しようと正面を向いた。

「あつ……」

ふと、俺の隣から、俺にかすかにとどくよくな声が聞こえてきた。
女子の声だ。

俺の隣の女子は霧沢さんしかいない。

左を向き、霧沢さんの方を見ると、心配げに俺を見ていた。軽く握つた左手を胸のあたりにおいて。

「どうしたの？」

彼女の表情を読み取つた俺は、教壇にいる先生に聞こえなつよくな小さな声で霧沢さんに言つてみた。

「あの……」

霧沢さんが俺の足元に視線を落とす。

俺もつられて見ると、俺の足元に、消しゴムが転がつてきていた。

「ああ、これか」

ひょいと消しゴムを拾い、霧沢さんに手渡す。

「はい」

「あ、ありがとうございます……」

ほんのちょっとだけ、霧沢さんは笑顔を見せた。

「ああ、俺、『森村大樹』。隣の席だから、よろしく。これも何かの縁だと思つし、困つたことがあつたら何でも言つてくれ。どうしてなのかわからない。でも、自然にそんな言葉がでていた。『もりむら、たいき……？』

ふと、俺の顔を見てびっくりしたような顔になる。

「え？ どうしたの？」

「あ、はい、なんでもないです。ありがとうございます……」

「あ、うん……」

でもそれも一瞬だつた。かすかにお辞儀をするような格好で、俺に笑顔を向けてくれた。気のせいだつたか。

「……」

窓の光に煙る霧沢さんの笑顔に、俺はしばし惚けてしまつた。霧沢さんは、こんないい笑顔も持つてているんだな。

俺は自分でもよくわからないこの慣れない感情に、当惑していた。

「よ、大樹」

「……胡太郎、なんだよ」

授業が終り、休み時間が始まるや否や、胡太郎が俺の席に来て話しがけてきた。

「二ヤ二ヤしていて、さも何かたくらんでいるという表情だ。胡太郎は一瞬霧沢さんを見て、俺を見る。

「どうだ、あの子」

「胡太郎、声が大きいぞ。彼女に聞こえるぞ」

俺も胡太郎につられて霧沢さんを見たが、俺たちの会話は聞こえていないようで、霧沢さんはずっと右手で頬杖をつきながら窓の外を見ていた。

「さつきまでちょっと調べたんだけどさ。あの子のことは、他の男達はあまり興味がなさそうだぞ」

「さつきって、霧沢さんが来たのはついためじゃないか」

「ふふん。俺の情報網は早いのだよ、森村君」

「ああ、そうかい」

まあ、さつきの皆の表情を見ればそれくらいの事はわかる。

「皆は、突然の転校生ということで気にはなっているのだけだな。このクラスには桜井さんや佐山さんを始め、芸能人、モデルレベルのかわいい女の子が多いだろ？だからあえて無理をして新しい所を攻めるよりも近いところをまず攻めておきたいというのがやつらの見解だ」

「そうなのか？」

「ああ。それに彼女のファーストインパクトがそれほどじやなかつたからってところもある。とりあえずは様子見つてところか。よかつたな」

俺の肩を叩きながら喜んでいる。

「何がよかつたんだよ」

「だから、あの子はお前」

「なんでそんな話になるんだよ」

「さつき、なんかいい雰囲気だったじゃないか」

「いい雰囲気？」

「ちゃんとチャンスを生かす術を心得ているじゃないか。そのチャンスを上手く生かしたから、彼女がお前に笑顔をむけたんじゃないのかよ」

……さつきの霧沢さんとの消しゴムのやり取りは胡太郎に見られていたんだ。まったく。胡太郎のやつそれをネタに俺をからかっているんだな。

「あんなこと、だれでもするだろ？」

「まあ、そうだけだな。転入早々不安な時に優しくされるっていうのがポイントなんだよ森村君。キミのそうしたやさしさ態度から彼

女の心のベクトルをキミ向けさせるという方法がね。いや、それでも、今回のは見事だつた。さりげなくそのチャンスを生かし、あまつさえこれから話し掛けるきっかけを作つた。こんなに抜かりないなんてさすがだな。お前がこんなに手の早いヤツだつたとは知らなかつたよ。いや、我が弟子ながらあつぱれ

「……俺が話していたことまで、聞いていたのか？」

「もちろんとも、親友」

あの位置から俺たちのあの声を聞き取るとは……。胡太郎つて、なんてすごいやつだ。

「その調子で、彼女のハートをゲットだな」

俺に向かつて親指を立てた右手を突き出した。

ああ、もうこうなつては胡太郎に何を言つても無駄だろ？
でも、まあ、霧沢さんの髪すごく綺麗だし。特に窓から漏れる光に溶けて輝く彼女の黒髪は絵になる。霧沢さんを描いてみたい……
なんて思つてしまつたことは確かだ。

「そうだな……。ハートはともかく、霧沢さんには興味があることは確かだけどな。正直な所」

ぽつりと、霧沢さんに聞こえないように胡太郎にそう言つた。

「おおっ！大樹の口からそんな言葉が出てくるなんて……。本気だつたんだなっ！ああっ、俺はうれしいぞっ！」

いきなりわめきだす胡太郎。

「なんだよ、それ」

「よかつたよかつた。うん。大樹も普通の男だつたんだなつてわかつてさ」

ばしばしと俺の肩を叩く。

「いや、俺はそういう意味じゃなくてだな……」

「いや、それはそういう意味だよ森村君。いや、ほんとうによかつた。これで小生は不詳の弟子にレッスンをする必要がなくなつたというわけだ。いや、めでたい。これで森村君は卒業だ。これからは今まで教えてきた小生の教育を糧にがんばるのだぞ」

「ちょ、胡太郎」

「それじゃ、またな、親友」

授業が始まるチャイムが鳴ると同時に、俺に手を振りながら胡太郎は自分の席へと戻つていく。

まったく、俺の話を聞こうともしない。

結局の所、俺が霧沢さんに興味を抱いても、決めるのは彼女なわけで、俺から何かできるということじゃないと思うのだが。

俺はただ、霧沢さんの髪をモデルとして、これからリサのような絵を描きたいと思つただけなんだ。まあ、霧沢さんをモデルとして連れて来て描くというわけじゃなく、見たことを想像で描くつもりなんだけど。

でも、霧沢さんに対しても少しだけ妙な感覚が残つてゐる。何か大事な事を忘れてゐるような、やらなければならないことを忘れているような……。

なんだろう、この感覚は。霧沢さんに関係があることなのだろうか。

まあいいや、そんなに気にすることでもないだろ。

「……」

霧沢さんの方を見ると、ずっと窓の外を見つめたままで、彼女の表情を伺う事はできなかつた。

その日の昼休み。

胡太郎は俺に、霧沢さんとまくやれよ、との捨て台詞を残して、そそくさと昨日言つていたC組の女の子と一緒にどこかに消えてしまつた。

まあ、胡太郎はいつもの事だが、さて、俺はどうしよう。隣を見ると俯いて所在なげな霧沢さんがさつきの授業で使つた教科書やノート等をかばんにしまつてゐる。

霧沢さんはこの学校に来るのは初めてだから、お昼をはじめ、色々なことをどうしたらよいのかわからないと思つ。

誰か同じクラスの女子とかが誘つてくれればいいと思つていたのだが、どうやら教室に残っているのはカップブルとか決まつた友人達などのグループだけだ。既に弁当やら購買品やらおもいおもいの昼食を取つてゐる。皆霧沢さんには興味を示さず、誰も話し掛けようともしてない。ここまで露骨とはさすがに面食らつ。

まったく……。薄情なやつらばかりだな。しかたがない。さつき困つたことは俺に言つてくれと言つた手前、何にもしないと言つのもちよつとだけはばかりがある。

でも女の子と話すのはちよつと恥ずかしい気もある。
ま、いいか。人助けだと思えば。

少しだけ躊躇した後、俺は霧沢さんに話し掛けた。

「あの、霧沢さん」

「あ、はい。あ、森村君」

霧沢さんは俺の方を見る。視線が俺のどぶつかる。その眼鏡越しの瞳に俺はちよつとどきつとした。

「あ、あの、霧沢さん、お昼とかどうするの？」

「お昼？」

「ああ。霧沢さん、この学校初めてだろ？だからさ、色々教えてあげようと思つて」

「えつ？」

「霧沢さん、お弁当とか持つて来た？」

「ううん……、何も」

「それじゃ、何か買つたりしないといけないか」

「うん……」

俯いて寂しげだつた。どうしようと思つていたのだらう。

「それじゃ、いつしょに行かない？学食とか購買とかを教えるよ」

「いいの？」

「俺のことか？見ての通り俺だけあぶれているから、気にしなくて

もいいよ。霧沢さんは転校初日なんだし、色々教えてあげるよ。

なんだか胡太郎みたいなことを言つてゐるな、俺。

「そうね……。それじゃ、お願ひしようかな……」

ちょっとだけ俯いて考えた後、そう言つた。

なんだか少し嬉しかつた。

「よし、それじゃ、手つ取り早いところで学食に行こう」

「はい」

最初ちょっとドキドキしたけど、女の子と話すことって、こんなに簡単なことだつたんだな。色々考えて損をした気分だ。

学食に行くと、かなりの生徒でいっぱい返してゐた。

「うわ、やっぱり遅かつたからだめだつたか」

「たくさんいるのね……」

空いている席を探そうと机を見渡したがさすがに全て埋まつているようだ。

「まいったな、学食は無理か」

「空いている席……ないみたい」

霧沢さんも辺りを見回して空いている机を探してゐたようだ。

「仕方がない。購買にしようか」

「そうですね……」

俺たちが学食をあきらめて購買に向かおうとしたそのとき。

「おっ。そこにおわすは我が親友ではありますか」

この声は。

「胡太郎。こんなところにいたのか」

目の前の席に胡太郎が座つていた。

「おおっ。大樹君、抜かりなく彼女を誘つてゐるじゃないか。うんうん。さすがに俺が見込んだ男だ」

「なんだよそれ」

「森村君？」

「あ、ああ、こいつは吾妻胡太郎つていつて、俺の友人なんだ。同

じクラスメイトだよ」

「クラスメイト？」

「（）紹介にあずかり光栄。私は吾妻胡太郎。（）の森村大樹君の友人をやらせていていただいております。よろしく、霧沢さん」

「は、はい……」

胡太郎は立ち上がり大仰に恭しく霧沢さんに挨拶をする。霧沢さんはいきなりそんな行動に出る胡太郎に困惑しているようだ。この普通とはかなり違う胡太郎だ。無理もない。

「で、大樹は霧沢さんと学食に食べに来た、と言つわけだな」

「他にここに来る理由なんかないじゃないか」

「くつくつく。そう照れるなよ。それにしてもちよつとよかつたぞ。俺たちは今飯を食い終わった所なんだ。な」

「ええ……」

胡太郎が視線を向けた先の席にはさつき胡太郎と出て行つた隣のクラスの女の子がいた。

胡太郎はいつものことだが、この女の子には迷惑じゃないのだろうか。その子は何事が起こったのかと不安げな表情をしている。

「というわけで、森村君達にこの席を譲るひつと思ひ」

「えつ？ いいのか、胡太郎」

「いいのですか？」

「もちろんだとも。もう飯は食い終わったし、俺たちはこれから用事があるのでなナ。そうと決まれば、善は急げだ。というわけですまいな、俺の親友なんだ」

「もう、仕方が無いわね」

胡太郎と同席していた女の子も胡太郎の事をよく知つているようだつた。胡太郎の行動から話をあわせていた。少し安心する。

「それじゃ、森村君。上手くやるんだぞ」

「何を上手くやるんだよ。でも、サンキューな、胡太郎」

「ありがとうござります」

「ああ、いいつて。それじゃ、（）ゆつくり」

胡太郎はいつしょにいた女の子とともに学食を出て行った。

俺たちは胡太郎に感謝しつつ、席についた。

「よし、それじゃ俺が何か買つてくれるよ。霧沢さんはどういづもの
が食べたい？」

「うん。わたしは何があるかよくわからないから、森村君に任せ
る」「苦手なものとかない？」

「うーん、大丈夫」

ちょっと人差し指を唇に当てて考える仕草をした後、そう言った。
「よし、それじゃ、他の人に座られないようにここで待つていてね」

「あ、うん。森村君、ありがと」

「いやいや」

なんだか口口口口と表情が変化して、最初に見たような暗くてお
となしいイメージの霧沢さんとは違い、明るい印象を受けた。

もしかしたら霧沢さんは、元々はこういう明るい性格の女の子な
のかもしれない。最初から霧沢さんがこうだったらきっと他の男子
生徒がほうつておくはずがないだろうに。そのくらい霧沢さんがか
わいく見えた。そんな霧沢さんと俺がいつしょにいられるなんて、
なんだか嬉しいような恥ずかしいような不思議な気分だ。

とりあえず、俺は日替わりランチを持って来た。

一人で生活している俺は弁当を作つて持つてくるなんて事はない
し、購買は面倒なのでほとんど毎日ここを利用している。おかげで
ここ全てのメニューを食べてしまつたものだから、すっかり飽き
てしまつて、こういう日替わりのような毎日違つた献立のものを食
べるようになつていた。

「お待たせ」

「あ、ありがとう、森村君」

「あそこの厨房の隣にある自販機で食券を買つて、厨房のおばちゃん
に渡せば出してくれるから簡単だよ。こつじて席を取るのが一番
の問題だけど」

「ふーん……」

「こういうメニューがあるけれどオススメはこの日替わりランチかな。こんなにあっても結構安いし」

「なるほどね」

今日の日替わりランチはチキンカツ定食。メインのチキンカツに味噌汁とお新香、ご飯とサラダがつくる。これで350円なのだ。

「森村君はここを良く使うの?」

「ああ。ほとんど毎日かな」

「そりなんだ」

「弁当は作ってくれる人がいないから持つて来られないし、購買つて結構面倒なんだよな。並んでも食べたいのが売り切れにすぐなつてしまつしさ。それに購買で買ったものを教室で食べるにしても、教室じやあんな感じだから居心地が悪くて」

教室はカツプルばかりで、目のやりどころに困る。

「くすつ。本当にそうね。わたしもお昼のときどきうしょうかつて思つちやつた。この学校つてみんなこんな感じなの?」

「そりなんだよ……。俺は結構さつきの胡太郎とよくお昼を食べるのだけど、あいつはあいつであんなふうにたいそうもてているみたいだから、よくこうして俺一人であぶれる事がある。一人身としてはつらいな」

「そりなの?森村君つて優しいし、もじると思つただけだ。彼女とかいないの?」

「そ、そんな」とはないよ。大体、こうして女の子と話すことだつて稀な事だし。なんていうか、女の子と話そうとしても恥ずかしくてなかなか話し掛けられないんだし」

「本当に?わたしにはこうして話し掛けているのに?」

「えつ。あ、なんていうか、霧沢さんこの学校初めてだつたし、霧沢さん一人でいたから、なんとかしてあげたいなつて思つたらそんなことどうでもよくなつちやつて」

「くすつ」

「えつ?」

「あ、『』めんなさい。森村君、面白いひとなんだなって思つて」

「そ、そつかな……」

「うん、そういう人、わたし好きだよ」

「そ、そつか？ ありがとう」

霧沢さんはにこにことしながら言つた。どうこう意図でそつ言つているのだろう。変なことを想像して意識してしまうじゃないか。女の子つてみんなこんな感じなのだろうか。

ああ、もう、何を考えているんだ、俺は。

俺はとりあえず目の前のランチセットを片付ける事にした。

霧沢さんもランチセットに箸をのばしていた。

「うん、このランチセット美味しいね」

「気に入つてくれると進めた甲斐があつて嬉しいよ。俺が作ったわけじゃないけど」

「くすつ。もう、森村君、食べる時に笑わせないで」

「そういういえば霧沢さんつて、本当は結構明るい人なんだね」

「えつ？ 明るい？」

「さつき初めて見たときほおとなしい女の子の子なのかな、なんて思つたんだけど、こつして色々話をしてくれるから」

「うん、でもあの時はこの学校に初めてですこし緊張していたからかな」

「ああ、なるほど」

「それには。わたし、昔からこつして転校する事が多くて、友達が出来てもすぐに別れてしまうから、最初から積極的にみんなと溶け込もう、なんて思わないようになつちゃつたの。そのせいかもしれないね」

「それじゃ、また転校してしまつ」とつてあるの？」

「ううん……。今度はずつといこむと想つよ」

「本当に？」

「うん。わたしの実家がこの街にあるから。それにね、もうどこかに旅をするなんてことがなくなつたから……」

霧沢さんは俯いて、何故か少しだけ寂しそうな瞳をした。何か辛いことがあったのかもしれない。

「霧沢さんの実家がこの街だったの？」

「俺はさりげなく話題の方向を変えた。」

「うん。小さい頃はこの街に住んでいたんだよ」

「そうか。俺もずっとこの街にいたから、もしかしたら小さい頃霧沢さんと会っていたかもしれないな」

「えつ？ 森村君、憶えてないの？」

「えつ？」

「わたし、森村君のこと知ってるよ。昔よく公園とかでわたしと遊んだじゃない」

「えつ？ 本当に？ ほんとうに？」

「くすり。やっぱり森村君面白い」

「ああ、もう、どっちなんだよ……」

「そうね、昔遊んだ仲だったよかつたかもね」

「そうだな。人の縁なんて遠いようで近いのかも。そんなことがあつてもいいかな」

「うん。そういうのって、いいよね」

霧沢さんは「ロロロロ」と表情が変わつて、二二二二二二二二と話をしてくれる。とても話しやすくて、楽しくて。お昼を食べ終わつても、霧沢さんと時間を忘れてずっと話をしていた。

それにしても、俺自身、こんなに自然に女の子と面と向かつて話せるなんてどうしてしまつたのだろう。

確かに恥ずかしいと思うのだけど、嫌じやない恥ずかしさ。そのおかげで、いつもの自分を忘れずに、相手に作ることなく接することができていい。今までの女の子に対する接し方と明らかに違う。どうも複雑な気分だ。なんだか自分の知らないことを知つて、自分に驚いているような気分だった。

でも、こんな気持ち、悪くはないかな。

放課後。

「それじゃ霧沢さん、また明日」

「うん。また明日ね、森村君」

お昼が終わつた後も霧沢さんとの学校の事とか自分のこととか色々なことを話しているうちに、気がつくと放課後になつていて。俺はこれから部活、絵を描くということが待つてるので、残りは明日ということにして霧沢さんと別れたというわけだ。

霧沢さんが教室を出て行くのを見ると、胡太郎が話し掛けてきた。
「ふたりで仲良くまた明日、か。かー。一日であれほど仲良くなるなんてな。俺びっくりしたぞ」

「胡太郎、なんだよそれは」

「あの後なにがあつたのかな?森村君。彼女、最初の印象とずいぶん違うぞ。なにがあつたかこの吾妻胡太郎に洗いざらい話してみなさい」

「なにつてなんだよ。俺はただこの学校についての色々なことを霧沢さんに教えただけだつて」

「かー、そんなどぼけちゃつてさ。やり手だね森村君。もうすっかりいい関係になつてているし少し妬けるぞ。霧沢さんと仲良くなつても俺を捨てないでくれナ、親友」

「ああ、わかつたわかつた」

まったく、どういう意味で胡太郎は言つているんだか。

「というわけで、俺も帰るな。今日は昨日すつぽかした分付き合わないといけないのでナ。大樹。また明日。部活頑張れよ」

「ん、ああ。また明日」

「じゃあな」

背中越しに手を振りつつ胡太郎も出て行く。

まったくしようがないな、胡太郎は。いつもの事だけどさ。

さて、俺はこれから絵を描かないと。

今日は霧沢さんの髪を見て触発された。少し色んな色使いをしてみたい。あんな綺麗な髪の色を出してみたい。

「ん、ていうことは、人物画を描かないといけないってわけか」

ふと思つたが、これはつかつだつた。

そういえば俺は今まで静物画や風景画は描いた事があるが、人物画は描いたことがない。

描けない理由があつた。

モデルなつてくれる人がいないのだ。

静物画はそこらの物を置いて描けばいいし、風景画は外に出かけて景色を写生すればいい。

だから今まで、リサのような絵を描きたいと思つていても描けなかつたのだ。

無論、鏡を見ながら自分を描くなんてまつぶらだつた。

「まいつたな……どうするか」

とりあえず描きかけの絵はないし、描きたい、と思つ絵でなれば描きたくないし、描けない。

「うーん、明日霧沢さんに頼んでみようか……」

でも、今日初めて会つた女の子に、あなたの髪がとても素敵だからモデルになつてくれ、なんて恥ずかしくて口が裂けても言えそうにない。

「仕方がない……。やはり想像して描くしかないか」

そんな絵の描き方もある。難しいが無理な事じゃない。

そう思つて絵を描く為に部室へと向かつた。

部室には誰もいない。

この美術部には本当かどうかわからないが、俺以外にも何人か部員がいるらしい。でも俺はその人たちと入部以来出会つた事がない。おかげでいつもこの備品を使い、好きな時好きなだけ静かに一人で絵を描いていられる。それはそれで嬉しいが、見てくれるのがたまに来る顧問の先生だけというのも少しだけ寂しい。

とりあえず、こつも使つてゐるスケッチブックに浮かんだ絵のタツチを描いてみる。

「髪はこんな感じで……。えっと」

ふと自分の描いた絵を見たら、リサの絵の構図に似ていた。

「どうか、あの絵のままの構図だ。女の子が中央にいて、横を向いていて、その髪が風に流れていって……」

女の子、霧沢さんだけど、その子自身もリサに似ていた。

「つて、なんで俺はリサを描いているんだ。こいつこう絵を描きたいわけだ、この絵を描きたいってわけじゃないのに」

我に返り、コンテでスケッチした絵を少し離して見てみる。見れば見るほどリサの絵だ。

「でも、そういえば今日俺、リサを見ていないな……」

それどころか、リサのことを今まで忘れていた。毎日、ほとんどかたときも見忘れた事がないリサの絵を今日はまだ見ていない。それは確か霧沢さんが来た時からだった。

「おかしいな……。俺がリサのことを忘れるなんて」

たぶん、霧沢さんと話をしていく、時間が経つ事も忘れていたほどだったからだろう。

絵を描くのを止めて、上着のポケットからリサの絵を取り出す。リサはいつも表情だった。

「まったく。俺は何をやつているのだろう」

しばらくリサの絵を眺めていた。

すると一瞬、そのリサの表情が、霧沢さんの表情とかぶった。

「えつ……」

何度か瞬きをしてもう一度リサを見てみる。

でも、見れば見るほどリサが霧沢さんに見えてきてしまう。

霧沢さんの瞳が緑色に見えるくらいだ。

目を擦る。

「どうしたんだろう、俺……」

霧沢さんの髪がリサのイメージだって思つても、リサはリサだし、

霧沢さんは霧沢さんのはず。

リサが霧沢さんに似ているつてことなのだろうか……。

霧沢さんを初めて見て、何か大事な事を忘れているつて思ったのも、リサに似ていたからなのだろうか……。

いや、そんなことないはずだ。女の子だからつてことで、俺はみんな同じように見えているだけなのだろう。

それにしても、なんだか色んなことを話した霧沢さんの笑顔が頭から離れない。長く女の子と話したことで俺は少し舞い上がつているかもしねない。

「今日はどうもダメだな……。やめやめ。明日にしよう」「どのみち人物画は描けないし、他の絵を描きたいといつ気にもなれない。

俺は道具をしまい、部室を後にした。

昇降口で靴を履き替えていたとき、ふと隣に生徒が来たのを感じた。

「あれ？ 森村君？」

「えっ？ 霧沢さん？」

隣の人影を見てみると、その人影は霧沢さんだつた。

「よかつた。やつぱり森村君だつた」

「霧沢さん、どうしてこんな所にいるの？」

「わたしは今日からこの学校の生徒になつたからだよ」

「いや、そうじゃなくて……」

「くすつ。「じめんね。森村君面白いから冗談を言つたんだよ。わたしはね、今まで職員室でいろんな手続きとかしてたんだ。書類にはんこを押すとかいろいろ。それでね、それがやつと終わつてこれから帰ろうとしたところなの」

「そりなんだ」

「森村君は部活終わったの？」

「ああ。今日はどうもダメだから明日にしようと思つた」

「だめ? どうしたの?」

「あ、えつと、俺は美術部で絵を描いているんだけど、今日せひいい絵が描けないから止めたんだ。明日また頑張るつもりで」

「ふーん、そうなんだ」

「ねえ、霧沢さん、一緒に帰らない?」

「うん、いいよ」

霧沢さんは笑顔で即答してきた。

「えつ? いいの?」

「うん。わたしの家の方角ならいいよ
いつしょに帰ろうと言つたのは、成り行きから出たもので、半分冗談みたいなものだつたのに。霧沢さんならそつ答えるとも思つけど、即答するなんて少し驚いた。

「霧沢さんの家はどっちの方向にあるの?」

「わたしの家は野高場のほうだよ」

「えつ? それじゃ、俺の家のほうじゃん

「そうなの?」

「ああ。俺も野高場」

「くすっ。それじゃ、かえり

「あ、うん」

まさか俺の家の方向だつたとは……。
さらにひと周りほどよけいに驚いた。

俺たちはそのまま、並んで校門を出た。

校門から出てしばらへしたとき、霧沢さんが楽しそうな口調で話しがけてきた。

「ねえ、森村君って、美術部だつたんだ

「うん、そなんだよ。部室で絵を描いてる
絵、描くの面白い?」

「本格的に描き始めたのは1年くらい前からなんだけど、結構面白

「コンクール？ そんなに絵が上手いんだ」「あ、いや、そんなほどじゃないよ」「それでもコンクールに入賞するくらいだもの、上手いと思つよ。今度森村君の描いた絵見たいな」「えつ？ 見たいの？」

「うん。わたしも絵には少し興味があるし」

「そうなんだ。だつたら明日見てみる？」「いいの？」

「うん、やっぱり色んな人に見てもらつて感想とか欲しいし。それに、霧沢さんに見てもらつとなるとそれなりにはりきれるし」「くすつ。森村君笑わせないで」

「いや、本気だつて」

「うん。それじゃ明日楽しみにしてるね」

住宅街をそんなことを話していたら、自分の家の近所まで來ていた。ドキドキしていたし、霧沢さんに相槌を打つていたから時間が経つ事を忘れていた。

それにしても、ずっと俺の隣を歩いている霧沢さん。俺の町内だというが、ここまでいっしょに着いてきていのだろうか。

「つと、霧沢さん、家どこなの？」

「えつ？ 野高場だよ」

「それはさつき聞いたよ……」

「くすつ。冗談だつてば。あ。この道をもうちょっとと行つた先

「そつなの？ 俺の家もこの道の先だよ」

「そつなんだ」

「それにしてもこの『野高場』つて、漢字を見たらなかなか最初は

「うん。わたしも初めて知つたとき、『のひづば』つて読んじゃつ

「それにしておこの『野高場』つて、漢字を見たらなかなか最初は読みないよね」

た

「そうね、『のじがせ』とか『やじがせ』なんでも読んじゃうよね。胡太郎なんでもつ半ばヤケになつて『のじがせ』って読んでこるよ」

「胡太郎君？」

「ああ、さつき学食で席を譲つてくれた俺の友達だよ」

「ふーん」

「つと、あ、ほら。あの二軒先に見える右側の青い屋根が俺の家だよ」

「青い屋根……」

「うん」

「わたしの家はあの信号のある道路をはさんで、その向かいの一軒先の赤い屋根の家だよ。見える？」

霧沢さんが指を指した方向には確かに赤い屋根の家が見える。

「えつ？ そこのの？」

「うん。 そうだよ」

「（近所さんだつたんだ……）

「くすっ。 わたしもびっくりした」

「そう言われると、近所に霧沢さんって名前の家があつたな。 そこが霧沢さんの実家だつたんだね」

「うん。 でも、もしかしたら本当に、森村君とは昔遊んだのかもしれないね」

「うーん、 そうかも……。 でも、子供の頃つとほとんど忘れてしまつていてるしなあ……」

「うん、 そうだよね……」

ふと、霧沢さんは遠くを見て、寂しそうな声をだした。

余計な事だつたかな……。

気がついたら俺の家の前まで来ていた。

「それじゃ、俺はこれで」

「あ、森村君、また明日ね」

「うん。それじゃ、霧沢さん、また明日」

「あ、そうだ。森村君」

「えつ？ なに？」

「森村君はいつも何時じろ学校に行くの？」

「朝は普通かな。8時半にホームルームだから、大体8時じろ家を出るよ」

「ねえ、明日わたしと朝いつしょに行かない？迎えに行くから」

「えつ？ いつしょに？」

「えつと……。近所だから面白そうだなって思つて」

「いいの？」

「森村君にはまだ色々聞きたいこともあるし」

「それだったら大歓迎だよ。俺、結構寝坊する事もあるから、霧沢さんが来てくれるとなると、うかうか寝坊もしていられないだらうし」

「くすり。うん。それじゃ、明日ね」

「うん。霧沢さん。また明日」

まあ、霧沢さんが言う冗談にしても、迎えに来てくれるなんて嬉しい。

でも、女の子から迎えに来るね、なんて言わると酷く照れてしまつて、最後まで霧沢さんの顔を見ていられなかつた。

それにしても、本当に明日霧沢さんは迎えに来るのかな。

霧沢さんにとっては俺の家は通学路の途中にあるとはいへ……。

うーん。

成り行きとはいへ、大歓迎だよ、なんて軽はずみに言つてしまつたことを少しだけ後悔した。

家に帰つた後、いつもと同じように一通り家事をし、俺はベッドに寝そべり、今日のこと、霧沢さんのことを反芻していた。

それにしても、俺がこんなふうに女の子と話すことができないなんて、自分のことながら酷く驚いた。

昨日胡太郎がおかしなことを言つた所為で、俺は少し何か意識していたのだろうか。

それにしたつて、今までの俺にしてみれば「」い事だ。

俺は今まで、女の子と話すとき、いつも変なことを考えてしまう。女の子と話をしているとき、この子は俺のことをどう思つだらうかとか、こんな事を言つて嫌われたりしないだらうかとか、ネガティブな方向しか思いつかない。

いや、それだけじゃない。

話をしている時に、この女の子と仲良くしたいな、つていう気持ちが出てくるのだ。

仲良くして、あわよくばこの子と……なんて口にも出せないほど恥ずかしい事を考えてしまつ。いつもリサを見て思つよつた恥ずかしい事を。

だから、話している相手の女の子に對して心象をよくしたいなつて思うのだ。

そうすると、そんな恥ずかしい事を思つていて相手に伝わってしまうかも知れない。そう思われたらその女の子に俺は軽蔑されるかもしれない。

なんて循環を思つてしまつから俺は女の子と話すことが苦手になつてしまつていた。

でも、霧沢さんには、この、あわよくば……つてこの気持ちが出てこなかつた。この子と仲良くしたいな、つていう気持ちはあるかも、その先には行かない。

ちょっと違うか。

霧沢さんは、俺の言つたことや俺の行動を面白いつて言つてくれたんだ。

それが長じて、たとえ、俺のあわよくばとこう考えを知られても、霧沢さんは気にしないような感じだつたんだ。知られても、それは

俺の冗談だつて笑つてくれるよつた気がした。

だから、俺は、気兼ねなく話せたんだ。俺の話し方がこれでいいつて思えたんだ。

胡太郎と話しているよつた感じまで受けたくらいだ
俺が胡太郎と話すときのようだ、何かを隠そうとか、特に心象を
良くしたいとか、そう言つた窮屈な考えが浮かばなかつたんだ。
霧沢さんとあんなふうに自然に話せるくらいなら、俺の絵のモテ
ルにもなつてくれと言えるかもしれない。そう言つても、いつしょ
に帰らうつて言つたときのよつて、いいよつて即答してくれるかも
しれない。

明日それとなく話してみようかな。

霧沢さん、か。

なんだか、彼女、すゞく……。
すゞく……なんだる。

まあいいや。

そういうえば霧沢さんは「近所さんだつたんだよな……。

子供の頃にこの街にいたつてことは、学区内からして俺と同じ学
校に通つていたと思うけど。

俺はその頃胡太郎とだけいつしょに遊んでいたつていう記憶しか
ない。

そうだ、明日胡太郎にも聞いてみよう。

胡太郎のことだ。女の子のことなら憶えているに違ひない。

「ふわあ……」

ベッドで物思いにふけつていたらなんだか眠くなつてきた。

今日はもう寝ようかな。

今日は絵も描けなかつたから明日は今日の分まで頑張らないとい
けないし。

それに明日霧沢さんが迎えに来てくれるつて言つていたから、寝
坊なんかしたら恥ずかしいし。

「あ。といえば、どうしてリサが霧沢さんに見えたのだろう？」

俺は思い出したようにキャンバスを手に取つてリサの絵を見てみた。やっぱり小さな写真なんかよりも本物の方がずっといい。

「リサは……リサだよな」

確かに、かわいいとこうところは似ているかもしねない。

黒髪はもとより、この優しい表情とか……。

つて、俺、すごい事を思つているな。

霧沢さんがリサに似ていることは、俺は霧沢さんにリサに思つていることをしたいつて思つてこになる。

なんだか恥ずかしくなつてきてしまつた。

「……あのや、リサ。君のモデルつて誰だつたんだ?」「えつ? ちょっとまてよ。

モデル?

もしかして、この絵のモデルが霧沢さんなんじや……。

「……いや、まさか。そんなことあるはずもない」

この絵は少なくとも数年は昔に描かれたものだ。

俺と同じ年齢の霧沢さんがその頃にこのリサの年齢のはずもない。

ちょっとだけ霧沢さんと雰囲気が似ているだけなんだ。

ああ、もう寝よう。

これ以上余計なことを考へると、変なことを霧沢さんに求めてしまひそうだ。

蒲団に包まる。時間はもう田舎が変わっていた。

世界が淡い白色とした霞みのよつたものに覆われてゐる。

「こには、どこだろ?」

なんだか昨日みた夢に似ている。

「ああ、そうか。」

これは俺の見てゐる夢の中だ。

夢か。そうか。

夢ならいいんだ。

あ。あそこに誰かいる。

二人いる。

小さな女の子と中年の男性のよつだ。

男性の方はイーゼルを前にたて、パレットのよつたものを持って
いる。右手には筆も持つて。

どうやら絵を描いてゐるようだ。

女の子はその男性の横に立つて笑顔を見せてゐる。

この女の子は……。昨日みた夢に出てきた女の子だ。

緑色の綺麗な瞳を男性に向けてゐる。

「おとうさん」

「ん? どうしたんだ?」

「そうか。このはこの女の子の父親なんだ。」

「あのこつえんであつたおとこのが、わたしのね、このがすき
だつていつてくれたんだよ」

「へえ。それはよかつたな」

「おとうさんといつしょだね」

「ああ、そうだな」

「わたし、こまちにすみたい」

「そうか。そうだな……。こはおまえのお母さんの生まれ育つた

街だしな。しばらくはここの街にいよつ

「ほんと?」

「ああ。この街にはおまえのことが好きな人もいるみたいだしな」「うん。わたしのこのめがすきつていつてくれたんだよ。そんなひと、はじめて」

「その男の子のこと、好きか?」

「うん、すき。だってよくあそんでくれるんだよ。わたしのともだちなんだ」

「そうか。それはよかつたな。それじゃ、お父さんも頑張つてこの絵を仕上げるか」

「うん」

「今度はお前を描いてあげるからな」

「ほんと?」

「ああ。その綺麗な瞳をこの絵に写してな」

「ほんと?」

「ああ。お父さん、頑張つてお前をすくへ綺麗に描いてあげるからな」

「ありがと、おとうさん」

「ああ」

父親はそつと女の子の頭を撫でている。

仲がよさそうな親子。

その女の子の瞳は、緑色だ。

あのリサの瞳と同じ、緑色だ。

そうか。

きっと、この人がこの子を描いた絵が、リサの絵なのかもしけないな。

ああ、そうだよ。この子が、リサのモデルなんだ。

この子が……。

『森村君』

あれ……。俺を呼んでいるのか……?

ピンポーン。

なんだか遠くで聞きなれた音がする。

「ん……」

『森村君』

霧沢さん……？

ピンポーン……。

これは……家のチャイムの音だ。

「あつ……」

そういえば、今日、霧沢さんが迎えに来てくれるんだつた。

「しまつた……。寝坊した！」

俺は慌てて飛び起きて、自分の部屋から飛び出し、玄関の扉の向こうにいるであろう霧沢さんに駆け寄る。

まだいてくれよ……。

「霧沢さんごめん、寝坊した。これから着替えたりするから先に行つていいよ」

「森村君？」

玄関の扉を少し開けて霧沢さんを見た。

よかつた。まだいてくれたみたいだ。

霧沢さんは昨日教壇に立つていたように、俯いて所在なげな佇まいをしていた。しかし俺をみて、ふわっと笑顔になつた。

「いや、ごめんつてば」

「よかつた。まだいてくれたんだ」

「はい？」

「ごめんね。わたしも寝坊しちゃったの」

「ええつ？」

霧沢さんはそう他人事のように言った。

玄関にある時計を見てみると、8時15分。

ここから学校まで走つても15分はかかるから、8時半にあるホーミルームには……。

「き、霧沢さん、先に行つて！」

「でも……」

「俺はいいから、遅刻しちゃうよー。」

「うん……。森村君も早くね」

「ああ、すぐに俺も行くからー。」

「うん」

遅刻しそうだつて言つのに俺の家に迎えに来るなんて……。

俺はすばやく身支度をして、家の戸締りをして、家を出た。

この間、5分とかかつてはいなはずだ。

「よし、ギリギリ間に合つかもしれないー！」

玄関を飛び出そととした時。

「あ、森村君。早かったね」

霧沢さんが家の門の前に寄りかかるように佇んでいた。

俺は玄関の階段を踏み外しそうになつてしまつた。

「つて霧沢さん！なんでこんなとこひどいの？！」

「あのね、森村君」

「う、うん」

「実はわたし、学校へ行く道をよく憶えていないんだ」

「えつ？」

「昨日来た時は近所の知り合いの人に車で送つてもらつたし、帰りは森村君と話しながら帰つたからよく憶えていなくて

「……」

「わたし、歩いて学校に行つたことが1回しかないから、ちゃんと行けるかどうか心配だつたから……。今日森村君と行ければちゃんとといけるから憶えるかなつて思つて。森村君が近所だつたし……」

「……」

「あ、そうだ。森村君」

「な、なに……」

「おはよう」

「……ああ、おはよう、霧沢さん」

霧沢さんは笑顔でのほほんとそう言つた。俺が今急いでいた空気とは明らかに違う、のどかな空気が流れていた。

左手の時計を見る。時間は既に8時25分。もう遅刻は免れない。

「霧沢さん」

「なに?」

「もう……。転校してきた次の日早々に遅刻だよ」

「あ。そうだね」

霧沢さんも腕時計を見て、さも他人事のようにそう言った。

「はあ……。それじゃ、学校に行こうか。ホームルームは遅刻……いや、もうついた頃には終わっているだらうから、1時間目の授業に間に合つよう」

「うん。ありがと、森村君」

俺たちは小走りに学校へと向かつた。

学校に着くと上手い具合にホームルームが終り、皆次の授業の準備をしている喧騒の中だった。

とりあえず授業には間に合つたらしい。

「いいタイミングだつたね」

「うーん、間に合つたと言つてこいやうなんとやう……」

「くすつ。わたしは結構面白かったよ」

「そうだね。ある意味俺も面白かった。でも、もうこんなのは勘弁だからな、霧沢さん」

「ごめんね、森村君。でもありがと」

「まあ、寝坊した俺も言えた義理じゃないけど」

「くすつ。それじゃ、森村君、また後でね」

「ああ……」

俺も霧沢さんに留つて席につく。

こんな形で女の子といつしょに登校するとは思わなかつた。貴重な経験かもしれない。

「あーあ。朝飯食べそこなつたか……」「

「大樹。うつす」

胡太郎がニヤニヤしながら俺の席に来る。

「ああ、胡太郎、おはよつ」

「ふふーん、森村君」

「な、なんだよ」

「一人してこんな時間に来るとはねえ。何があつたのかな?」

「ああ、ただの寝坊だよ。俺たち」

「ええつ！」

「なんで驚くんだよ」

「そつか。そつか。そういうことなんだな」

うんうんと楽しそうに頷く。

「胡太郎、なんだよ。言つていることがよくわからないぞ」

「ああ、大丈夫だ。ただ俺はいつもの大樹だったのかなって思つただけなんだ。すまん、親友。俺はお前を見くびつていた。俺を許してくれ」

「はあ？胡太郎、一体何を言つてているんだ？」

「いや、みなまで言うな。言いたい気持ちもわかるけどな。公衆の面前だ。そういう話題は控えようぜ親友。いや、それにしてもよかつたよかつた。おれが言つた通りがんばつたんだな。おめでとう」「なにがめでたいんだよ」

「それじや、詳しい話はまたあとでな。親友」

そのまま言いたい事だけを言つて胡太郎は俺の前から離れていく。

「おい、胡太郎……」

「昨日の夕方一人で歩いていくのを見たつていう情報は本当だったのか……」

胡太郎はなにやらぶつくさ言しながら自分の席に戻つていった。

「どうしたの？」

俺たちの会話を聞いていたのか、隣に座っている霧沢さんが話しあげてきた。

「さあ？でもあの通りよくわからないヤツだからな胡太郎は。霧沢さんも振り回されるかも。気をつけてね」

「くすつ。仲がいいのね」

「そう？」

「うん。そういうのついでやましいな。あ、先生が来たみたい」

「あ、ああ……」

まったく、胡太郎のやつ。一体何を言いたかったんだろ。後で聞きたいこともあるし、次の休み時間にでも聞いてみるか。

というわけで最初の授業が終わって早々、俺は胡太郎に話し掛けた。

「胡太郎、ちよつといいか？」

「ああ、どうしたんだ大樹。お前から話し掛けてくるなんて珍しいな。もうさつきのことか？まったく、しようがないな」

「ん、ああ、それも気になるけど、それはあとでいいや。あのせ、俺たちの小さい頃、俺たちの他に遊んでいた女の子とかいなかつたか？」

「ん？ 霧沢さんのことか？ よく遊んでたぞ」

「えつ？ 本当か？」

俺が訊く前に答えるなんて、本当に会ったことがあるのか？

「なんだ大樹、憶えていないのか？ あんなに仲良く遊んでいたのに。お前が霧沢さんと仲良くしているのはそうだったからじゃないのか？」

「そ、そうなのか？俺たち遊んでいたのか？」

それじゃ、あの話は本当のことだったのか……。

「あははは。そんなことあるはずないじゃないか大樹。霧沢さんは昨日転校してきたばかりじゃないか」

「えつ？」

「冗談だよ冗談。まつたく、そんな話までしてくるなんて、のりかか？このわ。もう妬けるね、森村君」

ひじで俺の胸をこづく。

「いや、霧沢さんの家さ、俺の近所なんだよ」

「そうなのか？あの『のこづば』に」

「ああ。口と鼻の先。昨日知つてびっくりしたんだ」

「ああ、もつ、だから森村君。そんな自慢話はいって『自慢じゃないって』

「冗談だ。えつと、『のこづば』だろ？昨日霧沢さんと一緒に帰

つたら、家が近所だつて事を知つた。だから昔からの知り合いじゃないかつて大樹は思つた。そう訊ねたら霧沢さんははぐらかした

「そうわ」

「でも、俺は大樹と会つてからずつと一人で遊んでいたぞ。3人なんて事はなかつたぞ。霧沢さんちのことも知らない。俺は。これは冗談じゃなく本当だ。第一、俺も知つていたら霧沢さんとお前にそうこう話をするさ。昔一緒に遊んだよな。とかわ」

「やうか……そうだな。だつたらいいんだ。すまないな、変なことを聞いて」

「それよりも大樹君」

「彼女、具合はどうだつた？」

「はあ？ 具合つてなんだよ」

「もう、森村君はシャイなんだから」

「なんだよ、それは」

「まあ、いいか。そんなことを訊くのは野暮だしな。霧沢さんをずっと大事にしてやれよな」

「胡太郎」

「なんだよ？」

「一体何のことを言つているんだ？さつぱりわからない」

「えつ？ 何を言つてているんだ。お前が霧沢さんを抱いたつてことだろ？」

「はあ？ 抱いた？」

抱いた？ 霧沢さんを？

それはつまり……。

想像したら急に顔が赤くなってきた。

「……胡太郎」

「ん？」

「なんでそうなる」

怒るよりもひどくあきれてしまった。そういえば胡太郎はそういうやつだった。

「だつて、タベ霧沢さんと頑張ったおかげで、仲良く遅刻してきたことなんだろ？ いいじゃないか若いってのは。俺も最初はそんなもんだつたし」

「はあ……。そんなことあるはずないだろ？」

「そうなのか？」

「今日は霧沢さんがこの学校への道がまだよくわからないからって言つことでいっしょに来たんだよ」

「またまた。俺はだまされんぞ」

「まったく。俺は仕方がないからいいとして、霧沢さんや周りの人にはそういう話はやめてくれよな」

「あはは。すまなかつた。セクハラだつたな」

「まあ、そういう所は胡太郎はしつかりしているからいいか……」

「で、どうだつたんだよ、本当の所は」

「つて、霧沢さんはなんにもなって。なんで俺がすぐにそういうんだよ」

「本当のかよ」

「本当に決まつていいじやないか」

「なんだ……。そなのが。つまらんな」

「まったく、胡太郎は……」

「でもまあ、いざれそなうだうしナ。頑張りたまえ、親友」

「ああ……がんばるよ」

「つむづむ

「方向はともわれ、これは胡太郎なりの励まし方なんだ。悪意はないと思う。

それにしても霧沢さんを抱いただなんて。冗談にしても酷いぞ胡太郎。

でも、ほんのちょっとだけ、そうなりたいなと思う自分もいて、恥ずかしいようなばつが悪いよつな、そんな複雑な気持ちだった。

一人きつの部活

「昼休みになつた。

「森村君、今日は俺学食じやないから、席は譲れないからナ」

「そうなのか。ああでも、昨日はありがとうな」

「いやいや、礼には及ばないって。それじゃ、俺は行くから。大樹は霧沢さんと仲良くな」

「なんだよ、それ……」

「ははは。じゃあな」

こうして今日も胡太郎は休みになつた早々に姿をくらまして、俺と霧沢さんだけになつてしまつた。

実は、さつき胡太郎が言つていたことが心に残つて、恥ずかしくて、ちよつとだけ霧沢さんに話し掛けることを躊躇していた。でも、このままずつと何にもしないでいるつて言つのもなあ……。

「森村君、今日も学食っ？」

そんなふつむだつしよつつかと思つていたら、霧沢さんから話し掛けてきた。

「あ、うん、そうだよ。霧沢さんもやつぱり学食？」

「うん」

霧沢さんの顔を見たら胡太郎が言つていたことなんどもよくなつてしまつた。まったく。変なことを意識しなければこうして普通にできるのに。

「それじゃ、またいつしょに行こうか」

「うん」

こうわけで今日も霧沢さんと学食に来た。

昨日よりも遅くなつてしまつたが、今日は昨日より人が少ないようだつた。今日は天氣も良いし暖かい。こういう日は外で弁当などを広げている連中が多いので学食に来る人が少ないのかもしない。そうか。きっと胡太郎もその一人になつたのだろう。

俺たちは難なく空いていた席に座った。

「今日は楽に座れたね」

「毎日こうだといいんだけど。今日はほんといてるな
くすつ。今日は遅刻をしてもお咎めなしだったもんね」

「ほんと、良かつたよ。霧沢さんのおかげかな」

「くすつ。もう森村君」

「あはは……」

本当に霧沢さんと話すのは楽しい。

そうだ、今ならあの事を訊いても承諾してくれるかも知れない。

「あのや、霧沢さん、一つ頼みがあるんだけど」

昼食をほとんど食べ終わつた後、躊躇いがちにそう切り出してみた。

「頼み？」

「俺、美術部にいるつて昨日言つたよね」

「うん。わたしに絵を見せてくれるつて」

「それでさ、これから次のコンクールに向けて絵を描こうと思つて
いるのだけど、その絵の……モデルになつてくれないかな？」

「絵のモデル？わたしが？」

「うん。人物画を描きたいんだ。霧沢さん頼まれてくれないかな

「でも……」

「いや、えつと、別にヌードになつてくれとか、何時間もじつとし
ていてくれというわけじゃなくて。ただ、その……、霧沢さんのそ
の髪がとても綺麗だつたから、描くときの参考にしたいな、って思
つてさ」

少しだけキドキしながらもくすつ言つた。

「わたしの髪？」

「あ、うん。霧沢さんの髪、すごく綺麗で、絵になるつて思つて
描いてみたつて思つた」

「綺麗……」

霧沢さんは照れるように自分の前髪をこじついていた。

「やつぱりダメかな……」

まあ、仕方がないか。

そう思つたとき、霧沢さんは笑顔になつて。

「ねえ、じつこののはどう?」

「なに?」

「わたしも美術部に入つて絵を描く」

「ええ?」

「昨日ちょっと考えたんだけどね、それもいになつて思つたの。実はわたしのお父さん絵描きさんだったの。だからわたしも描いてみたいなつて少し思つてたんだ」

「絵描きさん……」

「うん。ちょっとは名の知れた画家だつたらしいんだよ」
なんだか朝、見た夢を思い出す。
まさかな……。

それよりも、今、霧沢さん、お父さんのことを『だつた』と過去形で言つたよくな。

それに、少しだけ哀しそうな表情を見せた。

「へえ。お父さん画家なんだ。それじゃ、霧沢さんも上手いかも」「えつ? そ、そんなことないと思つよ。お父さん、画家だつたけどわたしも絵が上手つてことになるともこえないし……」

やつぱり聞き間違いじゃなかつた。霧沢さん、今お父さんのことを『だつた』と過去形で言つていた。

それじゃ、もしかして……。

「それじゃ、互いに描きながらつてのはどう?」

「あ、うん。それならいいよ。わたし、絵を描いている人の前で何にもしないつてことがちょっとだけ嫌だなつて思つたんだ。一生懸命やつている人をみながらじつとしてゐつて」とが

「ああ、なるほど」

いや、やつぱりお父さん「くなつたの? なんて聞けるはずもないよな。霧沢さんの冗談だつたら、そんなことを言つるのは失礼だし、

本当だつたら、そんなことを思い出す」とも嫌だらうからな。

俺の無粹な好奇心で霧沢さんを傷つけることもない。

「それなら大歓迎。それじやさつそく今日から行つて見る?」

俺は勤めて楽しそうな口調で言つた。

「くすつ。うん」

「それじや、よろしく、霧沢さん」

「はい。よろしくね、森村君」

霧沢さんが俺の絵のモデルになつてくれるだけじゃなく、霧沢さんといつしょに絵を描くことになるなんて。

これは思つてもみなかつた幸運かもしれないな。

今まで以上に描くことが楽しみになるかもしれないよし、がんばりや。

というわけで放課後。

胡太郎に霧沢さんといつしょに部活に行くとか言つたらまた冷やかされるだらうかと気にしたが、胡太郎は胡太郎でどつかの女の子とさつさと帰つてしまつたので少しだけ拍子抜けした。

それはともかく、俺は霧沢さんと美術部部室に来た。

当然ここには絵を描くための道具はなんでも揃つてるので、すぐには誰でも絵を描くことができる。

「さすがに何でもあるのね」

「ああ。水彩画から油絵まで何でも描けるよ」

霧沢さんは珍しそうに部室の物を眺めている。

「森村君は何を描いているの?」

「俺は静物画とか風景画かな。水彩画だよ。油絵もやつてみたいけどね、難しくて」

「ふーん」

「えつと、これが前に描いた俺の絵」

俺は奥から前に描いた絵を見せた。コンクールには出せなかつたものがいくらかある。

「わー。やつぱり上手い」

「そ、そう?」

「うん。なんとなく温かみがあるよ。森村君が優しい人なんだなつて感じられる」

「もう、霧沢さん……」

そんな笑顔で讃められると照れるつて。

「くすつ。わたしもこんな絵描けるかな」

「もちろんだよ」

「うん、わたしもがんばる

「あはは。俺も負けないから」

「くすつ。うん」

とりあえず絵を描く道具を揃えた。

「それじゃさ、霧沢さんは何を描く? 静物画とかやってみる?」

「森村君」

俺のほうを見てにこりと笑う。

「えつ?俺?」

「くすつ。だつてさつときそつ言つたじやない。お互ひに描こりうつて

「えつ?本氣だつたの?」

「だつて、わたしだけ描かれるの恥ずかしいよ」

「それもそうだけど……。俺なんか描いて面白い?」

「うん。面白いよ」

「もう、霧沢さん……」

そんなふうに霧沢さんに言われるとは思わなかつた。

「くすつ。それじゃ、このスケッチブックに描いていい?」

ふと俺が昨日描いていたスケッチブックを手に取る。

「あ、ちょっとまって。それは俺の描きかけだから……。えつと、これを使つていいよ」

昨日霧沢さんを想像して描いたあの絵なんか見られたら恥ずかし

い。俺は近くにあつた新品のスケッチブックを渡そうとした。

「あ、これ森村君のなんだ。ねえ。これも見せてくれる?」

「え、あの、ちょっと……」

霧沢さんはそのままぱらぱらと俺のスケッチブックをめくつていく。

「わあ。たくさん描いているんだね……」

「あ、あの、霧沢さん……」

そのままぱらぱら見ている霧沢さんを止める事が出来ずに、ただずつと見ていた。

「ふーん……。あ

「えつ……」

最後のあたりで何かを見つけたような声を出して、そのまま見入つていた。

「霧沢さん?」

「やつぱり上手いんだなあ……。うん、ありがと。ラフやスケッチでもこんなに上手く描けるんだね。森村君、やつぱりすげー」

「あ、ありがと……」

スケッチブックを閉じ、俺に返してくれた。あの絵は見られていなかつたのかな。それとも、見られていてもいい絵だつてことで片つけられたのだろうか……。まあ、もうじつちでもいいか。恥ずかしかつたけど、今では見られてもいいやつて気持ちになつてる。

霧沢さんつて不思議な人だ……。

「それじゃ、霧沢さんはこれを使って描いてみて」

「いいの?これ新品じゃないの?」

「備品だし、他に部員もいないし。いる部員は使えるだけ使っていいくことになつていてるし。遠慮はないよ

「そつか、森村君部長さんなんだもんね」

「部長?あ、そうか。そう言われるといこの部員は俺一人だからそつなるのかな……。気がつかなかつた」

「くすつ。それじゃ、これを使わせてもらおうかな」

「ああ。描くものもコンテから色鉛筆まで何でもあるから、なんでも使っていいよ」

「森村君は？」

「ああ、俺はスケッチブックにはコンテ。消しゴムを使わないよう描く練習も兼ねてる」

「ふーん。それじゃわたしもそれにしてみるね」

「ああ。それじゃ、ちょっと描いてみようか」

「うん」

俺たちは向かい合って絵を描き始めた。

真面目な顔になつて、俺とスケッチブックを交互に見ている霧沢さんを見ていると、なんだか緊張してしまつ。

俺も霧沢さんを見ながらコンテを動かした。

俺は逆光から霧沢さんを眺める形だ。夕方になつて窓から差し込んでくる夕日に溶ける霧沢さんの髪がすゞくいい。俺が望んでいた光景だ。

コンテが進む。

「ねえ、森村君」

「えつ？ な、なに？」

静かな部屋に霧沢さんの声が流れる。俺は少しひっくりして絵を描く手を止め、霧沢さんを見た。

「森村君って、いつもこんなに静かなことで一人で絵を描いていたの？」

「あ、ああ。たまに顧問の先生が見に来る事があるけど」

「そりなんだ……」

「まあ、静かだからはかどるけどね」

静かな部屋で霧沢さんと一人きり。なんだかそれを意識したら恥ずかしくなつてきて、霧沢さんの顔を見られなくなつってきた。

「寂しくない？」

「あ、いや、でも今は霧沢さんがいるから」

「ぐすつ。もう、森村君」

なんか照れるな……。

「でも正直少し寂しかったかな。せっかく描いても見せられるのは先生ぐらいだけだつたし」

「ねえ森村君」

「なに？」

「どうして絵を描こうと思ったの？」

「うーん、なんていうか……。俺の好きな絵があつて。その絵を初めて見たとき、そのとき落ち込んでいた俺を励ましてくれて。そのおかげで今の自分がいてさ。俺もいつかこんな絵を描けたらいいなって思つて始めたのがきっかけかな」

「そりなんだ……」

霧沢さんは納得したのか、そのまま次の言葉を出さなかつた。

霧沢さん、何を考えているのかな……。

そうして、しばらく互いに無言で絵を描いた。

「うーん、こんな感じかなあ……」

霧沢さんが書いていた手を止め、スケッチブックを少し離して見ていた。

「霧沢さん、出来た？」

「あ、わたしはまだちょっと恥ずかしいよ。森村君は？」

「うん、俺はこんな感じ……」

俺も少し絵を離して遠くから見る。元々素描……デッサンなので早く描けている。

霧沢さんの黒髪の輝きがほんの少しだけ思った通りにかけて、自分では少し良くな出来たかなつて感じに仕上がつた。

まあ、初めて人物画を描くのだからこんなものだろ。

「わあ。これがわたし？」

霧沢さんはいつのまにか俺の横に回つていて俺の描いた絵を見ていた。

「わっ！ 霧沢さん、見ないでよ！ 恥ずかしい」

「ねえ、そんなこと言わないで、もつと見せて」

「あつ……」

霧沢さんは俺がひつこめようとしたスケッチブックを取り、そのまま俺の隣で眺めた。

「わあ。森村君、やっぱり絵、上手いんだね

「そ、そりか……」

霧沢さんが俺のすぐ横に、霧沢さんの吐息を感じるくらいに接近している。女の子の、霧沢さんのいい匂いがふわっと俺を包みこむような感じがした。

「でも、これがわたしなんだなって思つと、ちょっと複雑な気持ち俺の絵を見ながら霧沢さんは言つた。隣にいる俺はドキドキしてしまつて、何を言つたらいいかよくわからなくなつてへる。

「ね、ねえ、霧沢さんのも見せてよ」

「わ、わたしはまだ初心者だからだめー」

俺が霧沢さん持つていたスケッチブックを手に取ろうとすると持つていた自分のスケッチブックを胸に隠すように抱いて、少し離れる。

「もう、俺だけ恥かしいじゃないか」

「でも、もうちょっと練習したら見せるから、ね」

「しようがないな……。それじゃ楽しみに待つてるよ

「くすっ。あんまり期待されると困るよ」

「でも、どう?俺の絵」

「うん。なんだか綺麗過ぎてわたしじゃないみたい」

「そう?」

「それとも、森村君にはわたしはこんな風に見えているのかな?」「霧沢さん、もう。せっかくモデルになつてくれた人を酷く描けるはずないじゃないか」

「くすっ。森村君照てる?」

「そりやそうだよ……まったく」

「でも、ありがと、森村君」

「えつ?」

「わたしね、嬉しかったよ。わたしを描いてくれたことが。本当にわたし……」

「えつ……」

霧沢さんの最後の言葉が小さくてよく聞き取れなかつた。

「くすつ……。ねえ、これ、スケッチブックつてことは本番じゃないんだよね」

「あ、うん、そうだけど……」

「また、わたしを描いてくれるんだよね」

「霧沢さんさえ良ければ大歓迎」

「くすつ。ありがと」

はぐらかされたけど、まあいいか。

それからもしばらく絵を描いていたら、夕日がだいぶ沈み、あたりが薄暗くなつてきていた。

「あ、もうだいぶ遅くなつて來たな。今日はこのくらいで帰らつか

「あ、ほんとだ。もう外は真つ暗なんだね」

「霧沢さん。明日から本番に向けての絵を描きたいと懇つたび、お願いしていいかな?」

「くすつ。いいよ。わたしも部員してくれたし」

「それじゃ、明日もよろしく。霧沢さん」

「はい。よろしくお願ひします、部長」

「な、なんか部長つて照れるな……」

「森村君照れそばつかりだね」

「もう、霧沢さん……」

「くすつ……」

その日もまた、俺たちは一緒に帰つた。

帰り道に絵を上手く描く方法とか、コツとかを色々話しながら。

霧沢さんは本当に楽しそうに相槌をうつてくれるし、そんな霧沢さんの仕草を見ていて、俺も楽しくなつてしまつ。

なんだか、じつして霧沢さんと出合えてよかつたと、心から思えた。

淡い白い靄の中。
ああ、また俺は夢を見ているんだな。
あ。またあの親子がいる……。
「ねえ、おとうさん」
「ん? どうした?」
「おとうさん、きょうもおでかけ?」
「ん? ああ。今日は公園の方に行つてくるからな。留守番お願ひな
うん。わたし、ねすばんする。それでね、おとうさん」
「なんだい?」
「あのね、わたし、おべんとつくりたの
「えつ? お弁当?」
「おとうさん、おひるの? まんないでしょ?」
「ああそりだけど……作れたのか?」
「うん。わたし、がんばったよ。まいにちがんばってれんしゅうし
たの」
「そりだい?」
「うん。それでね。わたしもこいつくりたからおなじものだ
よ」
「そりだい?」
「うん。それでね。わたしもこいつくりたからおなじものだ
よ」
「うん。それでね。わたしもこいつくりたからおなじものだ
よ」
「ねえ、おとうさん」
「なんだい?」
「わたしのおかあさんってどんなひとだったの?」
「ん? お前に似てすごく綺麗な人だったよ。よくお前とあの公園に
行つていて、すごく絵になつた」
「ほんとう?」
「ああ。そりだ、今描いておるお前の絵、お母さんを入れてみよう

か

「えつ？おかあさんを？」

「ああ。えつとお前が大きくなつたらお前の母親とやつくなれるだらうからな……」

「わたしがおかあさんになるの？」

「はははは。そうだな。そうだ」

「でも、わたし、おかあさんじやないよ」

「やうだな。お前はお母さんじやない。でも」

「でも？」

「お母さんのように綺麗になれる」

「ほんと？」

「ああ。もちろんだ。だからお父さんも綺麗になつたお前を描くつもりだ」

「ほんと？」

「ああ。お前がいい子に育つてくれるよつよ、いい絵を描くからな」「うんー。それじゃ、わたしもがんばつて、おここのおじいちゃんのおべんとつくるね」

「そうか。それじゃ、お父さんも頑張るな」

「うん！」

仲がいい親子……。

俺も昔はこんな頃があつたのだらうか……。

いいな。いろんな夢。

こんな夢を毎日見ることが出来たら……。

俺……。

次の日。

「森村くーん」

昨日と回じよつに霧沢さんが迎えに来た。

時間は8時ジャスト。霧沢さんもさすがに連續では遅刻はしなかつたみたいだ。

かく言ひ俺も、今日はちゃんと起きた。

さすがに霧沢さんが迎えに来てくれるって言ひからじは、そういう遅刻もしていられない。

「うん。霧沢さんおはよう。よし、今日はばっちりだ

「くすり。うん。おはよう森村君」

「それじゃ、今田はゆうへりこりますか」

「くすり。うん」

春の朝日はなんとなく清々しい。最近いつもして外の空気をのんびりとかみ締めるなんてこともなかつたな……。

「今日もいい天気になりそうだな」

「うん。そうだね」

「雨が降つて天氣が悪いよりも、こんなふうに晴れでいい天氣の方がいいもんなあ……。まあ、ずっとだと困るけど」

「ねえ、森村君」

「ん? なに?」

左隣に歩いている俺より顔一つ分くらい背の低い霧沢さんを見る。かばんを両手で持つて前に下げ、よくみる女の子の仕草をしている。

「えつと……」

俺を見て、霧沢さんは言葉を濁すように語尾を小さくした。

「どうしたの?」

「えつと、えつと……。でも、どうじょうかな……」

そのまま、霧沢さんは俯き加減で何かを考えているような仕草をした。

「霧沢さん、どうしたの?」

「森村君、変なことを訊いていい?」

「どうしたの? あらたまつて。俺でよかつたらなんでも答えるよ」

「えつと」

霧沢さんはなおも何かを考えているような表情。

しばらくそういうひで、ふと俺を見あげる。

「……あのね」

「うん」

「森村君……、あの、森村君って、一人で住んでいるの？」

「えつ？」

「えつと……。昨日もそつだつたんだけど、私がチャイムを押しても、森村君を呼んでも、家族の人人が出て来なかつたから……」

「ああ、そういうことか。うん。あの家で俺は一人で住んでいるよ」「えつ？本当に？」

「学生の一人暮らしってやつかな？かつ……だろ？」

俺は俺に家族がないってことを霧沢さんに知られて、変に氣を使わせたくないなと思つたので、そう茶化すようにして答えた。

「そりなんだ……」

「どうしたの？」

「ううん。こめんね。変な」とを訊いて

「変な」と。俺はともかく霧沢さんが何か氣にする質問じやなかつたよ」「……。うん。ありがと」

まあ、これでいいだろ。霧沢さんに余計な心配をかけたくないもんな。

「……。ねえ、森村君」

「ん？なに？」

「それじゃ、今日も学食？」

「ん？ そうだけど……」

「あ、あのね」

「うん」

「今日も……わたしとこつしょにお皿を食べない？」

「えつ？」

「いい天氣だし……」

「ん？ ああそだな。霧沢さんが誘つてくれなかつたら一人で寂し

い思いをしたと思つから、俺でよかつたらいつでも大歓迎だよ
いい天氣でどうじつしていつしょに学食に行くのかよくわからなかつ
たが、元々今日も霧沢さんとお皿を食べよつと思つていてたので断る
理由もない。

「くすつ。うん。それじゃわたし、お皿楽しみにしてるね」

「あ、うん」

さつきまでの何か悩んでいたような表情がふつと晴れて、霧沢さんにはにこりと微笑んだ。

「うーん、霧沢さん、今日は突然どうしたんだうつ。

まあ、いいか。

霧沢さんが楽しみにしてることまで言つてたので、お皿が気になつて授業もほとんどうわのそらだつた。

お皿前の授業が終わつたと同時に、俺の席に霧沢さんが一回一回しながらやつてきた。

「森村君」

「ん? はやいね霧沢さん」

「くすつ。ねえ、お皿にしよ」

「ああ、うん。早い方が学食も席が空いてるだらうし」

「ねえ、今日は学食じゃなくて、外で食べよ」

「外?」

「うん。いい天氣だし」

学食のメニューを買って外で食べるつことなのだらうか。学食に近い教室では教室に持つてくるようなやつは稀にいるが、外にまで持つて行くところそんなおかしな行動を取るやつはいないのだが

……。

「本当に外で食べるの?」

「うん。あの中庭とかいになつて思つていたんだ」

「ああ、やつか。購買で何かパンとかを買つてこじだな
それなら合点がいく。」

「くすつ。ねえ、森村君」

「なに?」

「わたしね、今日お弁と作ってきたんだ」

「えつ?」

「あのね、それでね……、森村君のも作ってきたんだ」

「ええつ?！」

「だから外で食べない?」

「つて、霧沢さん!」

「な、なに?」

突然大きな声を出してしまった俺に驚く。

「お弁当作つててくれたつて……。俺に?」

「うん。そうだよ」

「ほ、本当に?」

「うん。だつて森村君、一昨日のお金を忘れたわたしのためにお毎をおいじつてくれたじゃない。そのお礼だよ」

「そう言われたらそうだけど……。でも、いいの?」

「くすつ。だつて、二つ分作つてきちゃつたもの」

「本当に、本当に俺が貰つていいの?」

「くすつ。うん。だつてその為に二つ作つてきたもの」

夢を見ているのだろうか。

この笑顔で俺を見ている女の子が、俺にお弁当を作つてきたから
いつしょに食べようと言つてているだなんて。

本当に実際に起つていることなのだろうか。

すゞしく嬉しくて楽しい夢を見ている気分だ。現実が信じられない。

「どうしたの?」

「いや……。俺にお弁当を作つてくれて、いつしょに食べよう、
なんて言つてくれる女の子がいてくれたなんて、俺、嬉しくて」

「くすつ。森村君面白い」

「いや、本当だつて」

「わたしもお礼だから、ね」

「う、うん。それじゃ、行こうか」

「うん」

窓際の霧沢さんの席から見える中庭。

ここにはベンチとかあって、植木が規則正しく植えられ、ちょっとした公園のような佇まいを見せてている。

俺もよくカップルとかがここで弁当等を広げているのを見たことがある。

胡太郎もあそこはなかなかいいといつて、俺によく勧めたものだ。もちろん、彼女を作つてといつて断りを入れてだが。

その時は多分、絶対にそんなことはないつて思つていたのだが。でもそこに今、俺がいるのだ。女の子を連れて。

しかもその女の子が、俺に弁当を作つてくれているのだ。人生つて本当に何があるかわからないな……。

「森村君が何が好きかってよくわからなかつたから、色々入れてきちゃつた。口に合うかわからないけど……。はい」

青々とした春の木々の木陰で、空いていたベンチに座り、霧沢さんが持つて来た弁当を受け取る。やや大きめの男性用の弁当箱だ。

「あ、ありがとう。霧沢さんが作つてきたものなら、俺、何でも残さず食べるよ」

「くすつ。ありがと」

弁当箱を受け取り、少しだけそれを眺めていた。

左には霧沢さんが座つて俺を見ている。

ああ、どうにも緊張する。

ほんとうに、これ、俺が食べてもいいんだよな……。

「開けていい?」

「うん」

俺は意を決し、包まれてゐるナップキンをほどき、ふたを取つた。

「おお……」

「どうかな？」

弁当の中身は半分がご飯になつていて、半分がおかずという構成だった。

「ご飯はゆかりと細かいのりみたいなものがまぶされていて、手が込んでいる。

おかずの方はからあげに、卵焼き、たこの形のしたウインナ。切干大根に、ほうれん草のおひたし、大豆の煮物が入つていて。

野菜がたくさん入つていて栄養のバランスも取れたいいお弁当だ。それに、ちゃんとおかずとおかずの間には草の形をした仕切りとかががきれいにはさんであつて、見た目も完璧だ。

「すつごい豪勢だね。弁当箱も大きいし」

「そのお弁当箱はね、お父さんのだつたの」

「お父さん?」

「わたしね、いつも外で絵を描いているお父さんの為にいつもおべんとを作つていたんだ」

「そうなの?」

「うん。だからなんかおべんとを作らないと朝がどうもじゅうじこなくて。それでね、森村君がいつも学食だつて言つていたから、食べててくれるかなーって思つて作つてきたの」

「でも、こんなにたくさん作るなんて大変じゃないの?」

「そうでもないよ。おかずは昨日のうちに下しておいたら、朝はほとんど詰めるだけだし」

「ああ、なるほど」

「それにね、わたしの分だけだとおかずが余つちゃうし。だから「なるほどね。そんなことならいつでも大歓迎つていうか、めっちゃ嬉しい。ありがとう、霧沢さん」

「くすつ。森村君面白い」

「食べていい?」

「うん。お茶も持つてきたから」

「至れり尽せりだね」

「くすつ。はい」

「ありがと」

ポットから注いでくれたお茶を受け取りつつ、俺は霧沢さんの作つて来てくれたお弁当を食べ始める。

この霧沢さんのお弁当を開けた瞬間、いい匂いがして、見た目も美味しそうで、とてもじゃないが、食べたくて仕方がなくなつた。

もうさつきの緊張感なんて忘れていた。今はすぐにこのお弁当を食べてみたいという気持ちしかない。

最初にまず、この飯を食べてみる。

「……」

「どう?..」

今度はおかずを食べてみる。切干大根。

「……」

「森村君?..」

「」、これは……。

さりに、卵焼き、からあげ、大豆の煮物など色々食べてみる。

「……」

「森村君、どうしたの? 美味しくなかつた?..」

「これは。」、これは……。

「霧沢さん……」

「な、なに?..」

「俺、こんなに美味しいものを吃べるのは、何年ぶりだろ?..」

「え?..」

煮物の香ばしい醤油とみりんの匂い。から揚げのスペイス。たまごやきのふんわりした感触……。

このおかずは、昔俺の母親がよく作ってくれた料理の味がする。なんだかこういう料理がとても懐かしくて。そして、こういう料理が好きだったってことを思い出して。

この料理を出してくれた霧沢さんにすこく嬉しくなつて。

す"ぐじんとし"……。

「ぐすつ……」

「えつ? ど、どうしたの森村君?」

「あ、なんか、涙が出てきた……」

「えつ……?」

「あ、いや、ゴメン。あまりにも霧沢さんのお弁当が美味しいくて、じんとしてきちゃつて。」こんな美味しい手料理を食べられて、なんかす"ぐ嬉しくなつちゃつて……」

「森村君……」

「これ……、」のおかず、みんな霧沢さんが最初から作ったものだろ? 味付けから、煮たり焼いたりするまで

「えつ……。わかるの?」

「うん。俺は一人で暮らしているから、」の料理もコンビニのお弁当とかスーパーの惣菜とかの出来合いのものを買って食べるからわかるよ。」の素朴な醤油の味や、から揚げの調味料なんかも、最初から自分で味付けしないと"つ"いう味にならないんだよな「うん……」

「こういう手の込んだ料理つて、す"ぐ"懐かしく感じちゃつて、なんだか手を込んでくれた事に嬉しくなつちゃつて……。ぐすつ。あはは。ごめん、俺、すごく変だし」

「そんなことないよ……」

「なんか泣いちゃつたし……。かっこわるいな、俺……」

「ううん、そんなことないよ」

「ありがとう、霧沢さん。こんな気持ちになれたの、ほんと久しぶりだ。俺、霧沢さんと仲良くなれて、ほんとよかつた……」

「森村君……」

「あ、あはは。霧沢さんも食べようよ。俺一人だけ食べているの、なんだか恥ずかしい」

「あ、うん。そうだね」

霧沢さんも自分の弁当箱を開けたのを見て、俺は再び食べ始める。

「ああ、霧沢さんの弁当、すつ「」く美味しいなあ……。霧沢さん、ほんと料理上手いんだね……」

「もハ、森村くんたら……くすん」

「えつ？霧沢さん？霧沢さん、もしかして泣いてる？」

「ううん……、あ、ごめんね。なんだかわたし、嬉しくなつちやつて。森村君がこんなに喜んでくれるんだもの。なんだか作ってきてよかつたなつて思つたら、じんとしてきちやつて……くすん」

眼鏡の下から涙を拭きながら笑顔で俺に向いてくれている。

「霧沢さん……」

「ありがとハ、森村君」

「お礼を言つのは俺の方だつてば」

「くすつ……。そうだね。うん」

「あのや、霧沢さん……」

「なに？」

「ひどくあつかましいお願ひだと懲りなさび……。また作つてきてくれるかな、お弁当」

「うん。いよい。森村君が食べててくれるなら毎日作つてくれるよ」

「えつ？本当に？」

「うん。わたし一人分のお弁当を作るより一人分作った方が、材料も無駄にならないし。それに、わたし料理するの好きだから」

「それじゃ、お願いしていいかな」

「うん。それじゃお願いされるよ」

「あ、でも」

「なに？」

「俺が霧沢さんにお弁当のお礼を返せるものがない……。こんな美味しいものを頂いても、なんにもお礼できないよ」

「くすつ……」

「うーん、困つた」

「それなら、今度描いてくれるつていうわたしをモデルにした絵、コンクールで優勝してくれない？それが森村くんのお礼でいいよ」

「ええつ？」

「できない？」

「なんの。霧沢さんの」の、とても美味しいお弁当と引き換えなら、

俺何でもやるよ」

「くすつ。それじゃ、頑張ってね」

「でも、そんなのでいいの？」

「うん」

「そつか。それじゃ、俺、頑張るよ」

「くすつ。うん。がんばってね、部長さん」

なんだか人生最良の日が来たような気がする。

女の子が朝迎えに来てくれて。

お昼は俺のお弁当を作ってくれて。

その女の子をモデルにして絵を描く。

俺、こんなに恵まれていいのだらうか。

霧沢さん……。本当にありがと。

彼氏と彼女？

最近、不思議な夢を見ることが多くなった。
小さな子供達が出てくる。
俺はその子供達のやり取りを見ている。
そして、いるはずのない、みたことのないはずの、子供の頃のリ
サがそこにいる。
そのリサと仲がいい男の子がいつも楽しそうに遊んでいる。
その子たちはまるで……。
「ねえ、えをかけてみない？」
「えつ？おれが？」
「くすり。あのね、わたしのおとうさん、えかきさんなの
「そうなんだ」
「だからね、あなたも、えをかけてみない？」
「どうして？」
「くすり。えじうじてかな。わたしね、あなたにもえをかけてほしい
なつておもつたの」
「かいたほうがいい？」
「うん。わたし、あなたのかいたえをみたい」
「うーん、でもおれ、えなんかうまくかけないよ」
「だいじょうぶだよ。かけるよ」
「そうかな」
「うん」
「それじゃ、きみをかけてみたいな」
「えつ？」
「そのきみのきれいなそのめとかみのけ。かけてみたいんだ」
「ほんとう？」
「うん。かくんだつたらそのえだけだ」
「それじゃ、かけて」

「うん。それじゃおれ、がんばってかけてみる」

「うん。きっとうまくかけるよ」

「ああ。おれがんばってみる」

その子たちはまるで……。

今の俺と霧沢さんのような二人だった。

女の子の姿が気に入つて、男の子はその女の子をモデルにして絵を描く。

それは俺が、リサの絵を見ていたときに願つたそれと同じ夢。こんな絵を描きたって、願つたこと。

それは、今、本当に夢なのだろうか。

この夢の世界でも、現実の世界でも、違和感のない本当の世界のように感じられる。

そうだよな。

こうして楽しい世界が夢の世界だけってことはないんだよ。

これは、俺と霧沢さんがいつもしている楽しい日常の景色なんだ。昔はよく、俺は家族の夢を見ていた。

そんなときは決まって、目が覚めると憂鬱な気持ちになつていて。夢の中では楽しくても、現実は楽しくなかつたからだ。外見をいつも同じにしようとも、その外見を保とうとリサを見て自分を励ましても、やっぱり俺は、弱かつた。

胡太郎の言つていた通りなんだ。

本当は俺、誰かに自分を変えて欲しかつたんだ。

本当は、俺に何かをしてくれて、俺を励ましてくれて見てくれる人が欲しかつたんだ。

それが今、俺に、そうしてくれる人……。霧沢さんという人が現れてくれた。

もう自分に、「まかして、嘘をついて、外見を保つ必要がなくなつてきたんだ。

楽しいと思える現実ができたんだ。

この夢は、俺を変えてくれた象徴なんだ。

そう、思える。

いじめられていた小さな女の子を助けた男の子。その一人がいつも楽しく遊べるような一人になつて。

その二人はいつも楽しくて。

ずっとこれからも、いつしょにいられると信じられる日常にいることができる世界。

辛いことがあっても、それを助けてくれた人と楽しく暮らす事ができる世界。

それが幸せってことなんじゃないかな。

そうなんだよ。

俺は今、幸せの中にいるんだ。
ずっと、このままで過ごしていきたい。
この夢の世界のように……。

「でさ、あの時の大樹の顔つたら。そいつがまた可笑しいんだよな」「なんだよ胡太郎。霧沢さんにそんなことまでいふことないじゃないか。恥ずかしいだろ」「くすつ。でも、そんなことがあつたのね」「だろ？おもしろいよな。大樹つて」「なんだよ。胡太郎だつて、まだ『のこづば』って言つじやないか」「おいおい大樹。それじゃあまるで俺があほみたいじゃないか」「あははは。胡太郎ちがうのか？」
霧沢さんと、胡太郎と、俺とでよくこうして話をする。
気がついたら、俺は霧沢さんといつも一緒にいた。
「まったく、あれはのこづばでいいの。それ以外の読みは却下」「ほんの漢字一文字読み方を変えるだけでいいのにね」「そなのか？」「そだよ。胡太郎がいつも本当のことを知りたがらないからそ

ままなんだつて

「じゃあ何て読むんだよ。やつぱり『やうづじょう』か？」

「それは自分で調べるんだな。胡太郎は成績いいじゃないか」

「くそ。最近大樹俺に冷たいなあ。昔はそんなやつじゃなかつたのにさ」

「そりやか？」

「そうだ」

「くすり。ほんと、二人仲がいいよね」

「おう。もちろんだとも。ナ、親友」

「まあ、仕方がないな」

「ほーらな。いつも大樹はこんな調子だ。まったく、友達がいのないやつだよな大樹つて。霧沢さんも気をつけなよ」

「うん。気をつけるよ」

「おい、胡太郎」

「あはは」

「まったく、二人して……」

霧沢さんはあれ以来ずっと朝に迎えに来てくれて、毎日いつも登校している。

休み時間にはこんなふうに胡太郎とも交えて、たわいのないこと話をしていた。

お昼には霧沢さんが作ってくれたお弁当をいつもに食べて。

まあ、毎日だと霧沢さんも大変だろうから学食にする事もあるけど。

放課後になると次回のコンクールに向けての絵を描く為に、俺たちはいつもに絵を描いていた。

霧沢さんのいなかつたときが想像できなくなつたほどに、俺の生活の中に霧沢さんが溶け込んでいた。

無理もない。

霧沢さんと一緒にいると、俺が一人でいるんだつてことを忘れさせてくれたし、何より楽しかった。

最近じゃ、すっかりこのいつも持っていたりサの絵を見ることもなくなっていた。リサの絵を見るよりも霧沢さんと話すことが楽しくてしかたがない。

いや、むしろリサのことを忘れてしまっている。

持ち歩いている絵を見なくなつたことはもとより、家に置いてあるリサの絵も最近じゃ出してもらえない。

リサのような絵を描きたいといつよりも、霧沢さんをより綺麗に描きたいと思つてきているのだ。

そんな毎日が、霧沢さんと出合つてから1ヶ月、続いていた。

今日も、いつものそんなあたりまえになつて来た日常の一つだった。

「それでそのときだ、胡太郎はボストになるつて言つたんだよ」「ほすと？」

「ああ、あの郵便局の前にある赤い箱の事だよ霧沢さん。丁の字の上にもう一本線があるマークをつけたおしゃれなやつだナ」

「胡太郎、それはポストだう？」

「あれ？」

「あはは。でも胡太郎には似合つてないか？」

「ああ、わかつたよ。俺はポストになるさ。色々な人の手紙を受け取り、配るのさ。雨にも風にも負けずに毎日ナ」

「ああ、がんばつてくれ。応援しているぞ」

「なんだよ大樹。せつかく俺が一人ぼけとのつひとつみしたのに、本気にするなよ」

「あはは」

「くすつ」

「そういえば大樹。最近笑うことが多くなってきたな」「えつ？ そうか？」

「そうね。大樹君、いつも楽しそうにしているよね」

「昔はいつも顰めつづらで、俺が遊びに誘つても冗談を言つても、たいして楽しそうな顔をしていなかつたのにな」

そう言われば、俺、前まではそんなに笑っていなかつたような気がする。胡太郎と一人だつた時は楽しかつたが、笑つていたとう思い出がない。

「やっぱり彼女ができると男は違うか。いいことだナ。森村君」「えつ？ 彼女？」

「彼女？」

俺たちは顔を見合せた。

「ん？ なんだい。お一人さんともにとぼけちゃつて。お前達二人の事はもうクラスの公認になつていいんだぞ。しかも最もいいカップルとかつて噂の種だ。他のクラスの連中まであんな二人になりたい、という目標にもなつてゐるくらいなんだぞ」

「そうなのか？」

「そうなの？」

「なにを言つか。毎朝いつしょに登校してきて、霧沢さんが大樹にお弁当を作つてきてくれている。それに放課になると二人だけで部活動に励む。かー、絵に描いたようなラブラブカッブルじやないか。皆が冷やかしたりどちらかに声をかけたりしないほどだからな。ほんと完全無欠のお似合いカッブルだ。はあ……俺もお前らのようになつてみたいわ。あ、そうか。俺邪魔者だつた見たいだナ。俺はそろそろ退散するとするわ。お前らは今日もこれから部活なんだろ？」

「ああ、そうだけど……」

「それじゃ、俺は帰るわ」

「胡太郎、もう帰るのか？」

「ああ。俺は今日もこれから約束があるのでナ」

「そうか。ならしかたがないな」

「ああ、そうだ森村君」

「なんだ？」

霧沢さんに聞こえないように、俺の耳に近づいて話す。

「いくら好きあつているつて言つても、ちゃんと避妊はしないとダメ

メだぞ。特に学生のうちはナ。それが思いやりつてもんだ

「胡太郎！」

まつたぐ、何てことを言うんだ。

「あはは。それじゃあな大樹。霧沢さんも」

「それじゃあね、吾妻君」

「まつたぐ……、それじゃあな、胡太郎。また明日」

「ああ。それじゃ」

胡太郎がいつものように後ろ手で手を振りながら帰つていく。教室で霧沢さんと一人きりになつた。

「ねえ、大樹君。わたしたちカツブルだつて」

霧沢さんは俺を見上げるようにして微笑んでいる。

「らしいな」

うーん。それにしても色んな意味で複雑だ……。

俺はそんなことを意識しないで霧沢さんと接していたのに、あたりの連中は俺たちを恋人同士だと見ていたらしい。

胡太郎はよく誇張して物事を伝えることがあるが、嘘は言わないので、本当のことなんだろう。

よくよく考えると無理もない話だとは思ひけど。

「ねえ、大樹君」

「ん、なに霧沢さん」

そういうえば霧沢さん、いつのまにか俺のことを名前で呼ぶようになつていたな。それに前に比べてずいぶん積極的になつているような気もする。

「あのね。わたし一つお願いがあるんだけど……」

「お願い？ なに？」

「この際だから、本当に恋人同士つてことにしない？」

「えつ？ 恋人同士？ えつ？ それつて？」

「もう。わたしの彼氏になつてよ、つて言つてているの」

「……彼氏？」

「もう、大樹君。大体、こう言つて事は男の子から言つるものじゃない

の？」いつの間にかわたし、すうへじやせじやしているんだから

ら

「でも、彼氏彼女って、一体どうこう」とをこいつの？」

「うーん、そう言わるとわたしもよくわからないかな。でも、お互いにそういう意識をもつことの大切つてこいつ」とうしこよ

「どうか、そういうものか

「うん」

「それよりもさ、俺みたいな男が彼氏でいいの？」

「大樹君こそ、わたしじゃ嫌？」

「そんなことない」

「そんなことないよ」

見事に一人ではもつてしまつた。

「……」

ばつが悪くなつて霧沢さんから田を離した。

なんだか本当に息があつていいんだな、俺たちは。

「あ、あはは」

「くすり……」

「それじゃ、これからもよろしくつて」とで

「うん」

「まあ、今までとそれほど変るものじゃないと思つけど……」

「くすり。そうだね。あ、それじゃお願ひがあるかな

「なに？」

「わたしのこと、お前の方で呼んで」

「えつ？」

「わたしの名前は、霧沢美裕。美裕つて呼んでみて

「えつ……は、はずかしいな」

「ほら。わたしの彼氏さんになるんだから。いつも『霧沢さん』じゃちょっと嫌かなつて思つたの。だから、ほら」

「ここにこしながら俺を見上げている。

女の子を名前で呼ぶなんて、すつ“じ”く恥ずかしくて霧沢さんを見ていられなくなつてくる。

「えつと……みひろ……」

「なに? 大樹君」

ほんと嬉しそうな笑顔を向けてくる。

俺は耳まで真つ赤になつてるかもしない。

「やっぱり恥ずかしいな……」

「そう?」

「あのせ、それじや、美裕…も俺のこと呼び捨てにしてくれない?」「えつ?」「えつ?」

「俺は大樹。大樹つて、呼び捨て
もう恥ずかしくて照れてしまつて、美裕にも同じ気持ちを感じて
欲しくて。

「えつと、えつと……。大樹……君」

「あはは。美裕だつて照れてるじやん」

「もうつ。大樹君!」

美裕も顔が赤くなつていた。かわいい。

「ほらほら。俺の彼女なんだから、他人行儀の君付けはなしだよ。

美裕

「あー。なんだか大樹く…はもう慣れてる……」

「あはは。美裕は美裕らしいな。と、もうこんな時間になつちゃつ
たな。早いとこ部室に行こいつ」

「あ、そうだね」

「続きは部室で」

「わたしは負けないから」

「俺も負けない」

「くすつ……」

「あはは……」

二人でいつものように部室で絵を描く。

俺はコンクール用の絵を描く為に、霧沢さん……じゃない、美裕と

はこつものようにじうじうして向かい合つて絵を描いている。
ああ、今日からこの女の子が俺の彼女なんだよな……。
スケッチブックと俺を交互に一生懸命見ている美裕。
なんだか意識すると美裕を見るのが恥ずかしくなってきた。
でも、こんな恥ずかしさは嫌じやない……。
やっぱり俺、果報者かもしれないな。
俺の彼女になってくれた美裕に、俺、いろんなことをしてあげたい。
優しくしたいって気持ちでいっぱいだった。

「ねえ、大樹」

「なに？」

ふと美裕がスケッチブックから顔を上げて俺に話しかけてきた。
「前に……大樹が絵を描くきっかけになつた絵があるつて、言つて
いたよね」

「あ、うん」

「その絵、よかつたらわたしにも見せてくれないかな？」

「えつ？ 見たいの？」

「うん。本当は前からちょっと気になつっていたの」

「うーん、でもちょっと恥ずかしいかな」

「恥ずかしい？」

「正直に言つとさ、俺、その絵のこと、好きつて言つよりも惚れて
いたんだ」

「惚れていた？」

「ああ。なんていうか、人を好きになるつて感じに近い感情をその
絵に持つたんだ。そのおかげで俺は辛かつたことから立ち直れるこ
とができたんだけど……。だからさ、なんていうか、そういうの普通
の人つぽくないだろ？ 絵のことを好きなんて、なんだかっこ悪い
感じがして恥ずかしい」

「そんなことないよ」

「そうかな……。でも、その絵は女の子の絵だし……」

「でも、大樹がそんなに好きになるくらいの絵なんだから、きっと
すごく綺麗な絵なんだよね。だったらなおさら見てみたいな」

「うーん、そんなに見たい？」

「うん」

美裕はにこっと笑顔を見せていて。そんな顔をされると俺はどんな事も断れない。

まあ、俺の彼女の美裕にだから隠し事はしたくはないし、見られても絵なのだから別に問題になるものでもないから、いいか。

「それじゃ……。えっと、本物は家にあるんだけど、写したものでよければここにあるよ」

「ほんと?」

「ああ、この絵なんだけど……」

俺は上着のポケットから最近ほとんど見なくなってしまったリサの絵を取り出して美裕に見せた。着たきりの制服の上着だ。忘れる事はない。

「そういうえば俺も久しぶりにこの絵を見るなあ……」

「この絵……」

「どうしたの?」

美裕はその絵をじっと見て、遠くを見るように田を細めていた。

「もって、たんだ……」

「えつ?」

「大樹……」

美裕は座っていた俺の正面に立ち、俺をじっと見つめてきた。

「美裕?」

「あのね……」

「なに?」

「やっぱり、わたし、大樹のことを知っていたみたい」

「えつ? 知っていた?」

「この絵に描かれている女の子はね……。わたしなの」

「えつ? どういうこと?」

「だって、この絵は、わたしのお父さんが描いたものだもの」

「美裕のお父さんが?」

「うん。ほり、この片隅に『 r i s a 』って文字が書いてあるよね」

「う、うん……」

この絵の女の子の名前をリサとつけたのはこの文字があつたから

だ。

「わたしの苗字は霧沢だよね。ローマ字になると『Kureissa-wa』ってなる」

「ああ

「お父さんは名前の『Kure』と『wa』のどじりを伸ばした感じにして『Kureisa』って銘を打つたの。銘っていうのは自分が描いたつてしるしなんだけど……それをね、こんなふうに絵の片隅に書いたの。だから……。これはお父さんが描いた絵なの。そしてこの絵はわたしのお父さんが、小さい頃のわたしをモデルにして描いた絵」

「小さい頃の美裕をモデルにしたつて……。でも、この絵の女の子は俺たちと同年齢に見えるよ」

美裕が言つていることが、信じられなくて。

でも、もし、それが本当のことだつたら。

「うん……。それはね、お父さんがわたしを見て、わたしの小さい頃亡くなってしまったお母さんと重ねあわせて、未来のわたしを想像したものなんだよ」

「でも、この女の子の瞳……。虹彩は縁だよ」

美裕の瞳を見つめた。

でも、美裕の瞳は髪と同じ漆黒だった。

「……大樹」

「なに?」

「驚かない?」

「うん」

「あのね、それじゃ、見せてあげる。大樹はわたしの彼氏だから」

そう言つて、美裕は眼鏡を外して屈み、手で目を触つて何かをしていた。

「わたし、本当はいつもコンタクトをしていたの。虹彩の色素が薄いから紫外線を受けやすくて、明るい所にいると眩しくて見られなくなっちゃうから、学校にはしていけないサングラスの代わりのよ

うに使つてゐる。眼鏡は色付きコンタクトだつてわからなによつてするための伊達眼鏡……」

「……。」
「さう言つて、俺のほうを見た美裕の両目は、リサの絵と全く同じ

緑色の虹彩を持つていた。

「ほら……。わたしの瞳、緑色でしょ」

いつも見ていたあのリサの瞳とまったく違わない綺麗な緑色。森の新緑。初夏の樹々が生き生きと見せるあの緑色。

俺をじっと見つめてくれる美裕の瞳に、俺は吸い込まれそうになつていつた。

心臓がドキドキしていた。その音が美裕にまで聞こえそうに思えるほどだ。

夢じやないのだろうか。

「美裕……それじや、本当に……」

「うん。わたし、特異体質なんだ。こんな緑色の瞳を持つ人なんてほとんどいないんだつて。おかげでごく目立つからそれを隠す為にもこれが必要だつたの。昔は気持ち悪いつてずいぶんいじめられたりもしたんだ。でもね、お父さんもわたしのこの瞳を見て、すごく綺麗だつて言つてくれて。この絵を描き残したの」

「……」

もう驚く事なんかないと思つていたのに。

美裕がリサだつたなんて。

俺は、俺は……。

「それでね……。もう一人。お父さんの他にわたしのこの瞳を好きだつて言つてくれた人がいたの。その人に、別れるときお父さんはこの絵をあげたんだ」

「それじや、もしかして……」

「大樹。あなたのことだよ」

美裕の緑色の瞳が俺をじっと見つめていた。

そうだ。この瞳を見るのは初めてじゃない。

ずっと昔、すっかり忘れてしまったほどの昔、俺はこの子を見た

ことがある。

はっきりとした既視感。

そうだ。

その女の子が俺の初恋の女の子だつたんだ。

俺はその子のことを、本当は知っていたからリサを好きになつたんだ。いや、知つていたからリサを代わりにしたんだ。

その女の子がいなくなつてしまつたから、その思い出のカケラ、心に残つていたほんの少しだけの情景を糧として、その面影の残るリサに、俺は今になつて、心惹かれたんだ。

本当のこの絵の女の子がいなくなつてしまつたから、いないと思つていたから……。

そうなんだ。あの夢見たのもその為だ。

あの夢もきっと、俺に起こつた出来事を、忘れてしまつた中で、無意識の俺の記憶から見せたものだつたんだ……。

「そうか……。そつだつたんだ。だから俺は、この絵の女の子を好きになつたんだ……。俺は自分でも忘れてしまつた記憶の中で、無意識のうちに美裕のことだけを思い出して。それを投影して……。この絵のことを。そつだつたんだよな」

「大樹……」

「でもさ。俺は、この絵の女の子の事を好きだつたけど……。この絵の女の子のモデルがいるかもしれないって思つたことがあつたけど……。俺はそれが最初から美裕だつてことはわからなかつた」

「うん。それはしかたがないよ」

「それにさ。本当は俺はもう、この絵のことはどうでもいいんだ。確かにこの絵を見て俺はこんな絵を描きたいって思つていたけど、この絵の女の子に惚れていたけど、今は違う」

「違う?」

「俺は今、美裕を……俺の目の前にいる女の子を描きたいって思っているんだ。その絵はもう今のきつかけにしか過ぎない」

「大樹……」

「俺は、美裕が俺と逢った時から優しくしてくれたから、今の美裕を好きになつたんだ。美裕のことを好きになつたんだ。絵は昔の事を思い出せたきつかけかもしないけど……。美裕が俺と出逢つたときからの美裕だから俺はこうして美裕といつしょにいる。それじゃ、だめかな？」

「くすつ……。大樹はいつも、わたしが思つてることを先に言つてしまふのね」

「えつ？」

「わたしも、そうなの。きつかけは昔の大樹を思い出したから。わたしはこの学校に転校してきたときに大樹を頼つたの。でも、大樹は昔のわたしのことなんて覚えている様子もなかつたし、そんな話もしなかつたよね」

「うん？ ああ」

「でもね、わたしのことを憶えてなくとも、大樹はあの頃と少しも変わらずに優しい今までわたしに接してくれた。たくさん気を使つてくれて。優しくしてくれて。それが、嬉しくて。だから、昔の事を忘れたまでも、わたしの知つている大樹じやなくともいいつて思つてた。だつて、過去のことなんか良くて、こうして、今のわたしを見てくれているんだもの」

「ああ。俺は今の美裕が好きだ。それは嘘じやない」

「くすつ。だからそんな大樹がわたしも好きになつたの」

美裕が俺に抱きついてくる。

ふわふと、美裕の甘い、女の子の香りが俺を包み込んだ。

「だから、大樹は、私の彼氏さん」

「美裕……」

俺も美裕を抱きしめた。

美裕は俺を見つめていた。

そのまま、美裕の瞳が閉じていく。

俺は、こうなる事が当然だと思つよつに、美裕の唇にそつと口付けた。

暖かく柔らかい美裕。

俺が以前、リサに望んで、想像した感覚が、ここにあつた。

「大樹……」

「美裕……」

ゆつくりと開けられていく緑色の美裕の瞳。こうしてみると、美裕は最初からこんな瞳をしていたつてことに、違和感なく感じられた。

「美裕。その瞳、本当に綺麗だな……。こんなに近くで見て、俺、美裕に吸い込まれそう……」

「くすつ……。ありがとう、大樹」

「でも、ごめんな。今まで昔の事忘れてて。覚えていた方がかつこよかつたんじゃないか?」

「ううん。いいのよそんなこと。だって、大樹はこの絵をまだ持つていて、この絵の女の子を好きだつて言ってくれて、こんなに大切にしてくれていたんだから。それでね」

「美裕……」

「わたし、大樹の恋人で、いいよね」

「ああ。もちろん。こんな俺でいいならずつと美裕の恋人をお願いしたい」

「くすつ……」

「なあ、美裕。一つお願いがある」

「なに?」

「今度からさ、その瞳をここだけでいいから、見せてくれないか?俺、美裕のありのままを描きたい」

「くすつ。いいよ」

「ありがとう」

「うん……」

「よし、俺はこれから頑張る」

「くすつ。うん。がんばってね。大樹」

「ああ。」この美裕のお父さんが描いた絵のよつに皆が心惹かれるような美裕を描いてみせる

「あ、でも、それはちょっと嫌かな」

「どうして？」

「わたし、大樹以外の人には好かれるの、困る」

「あはは」

「くすつ」

美裕がリサだった。

なんていう偶然なんだろう。

お互いに過去のことを忘れていても、いつ出して出合えて、仲良くなって。

再び、あの時の頃と同じように、一人でいつしょにいられるようになつて。

これが、もしかして、見えない赤い糸というもので結ばれていたつてことになるのだろうか。

でも、そんな偶然、すごく嬉しい。

俺の愛した絵の中の女の子が現れたのだから。やつと見つけた。

俺の幸せ。

もう大丈夫だ。

俺はこれからも生きていける。

この美裕が俺のそばにいてくれる限り。

「よし、みひる、できたぞ」

「えつ？ たいき、できたの？」

「これだ」

「わあ。たいや、おもつたよつじよ「うすだね」

「なんだよ、そのおもつたよつじよ」

「くすり。」じめんね

「それでや、このえをみひるてあげる

「えつ？ほんと？」

「ああ。そのためにがんばってかいたんだ」

「たいや……」

「このえをみて、おれのことおもいだしてくれるよな

「うん。わたしぜつたいたこきのことわすれなことよ」

「ほんとうか？」

「うん」

「おれも、おまえのおとつさんからせうりたみひるのえをみて、ず

つとみひるの」とをわすれないからな

「うん……」

「それでや、もし、またであつたひ、そのときまでも「おせせむつ」と

えのれんしゅうをしてつまくなつて、またかいてあげるからね」

「ほんとう？」

「ああ。おまえのおとつさんよつせうりたみひるかいてみせるわ」

「くすり。おとつさんよつせうりたみひるなんてかけないよ」

「こや、せつてみる」

「うん。それじゃ、たこき、がんばってね。わたしはかなうすむべ

つてくるから」

「ほんとうだぞ」

「うん。だつて、わたし、たいきの」とがだいすきだか？」

「えつ……」

「だか、ひ、せつた、ね」

「ああ。おれもぜつたい

美裕は、その緑色の田の所為で、明るい所が見られないらしい。

その為に、病院に行く事になり、それを兼ねて画家の為に放浪していた父親と遠くに行く事になってしまった。

でも、それは今生の別れじゃない。

俺は美裕に俺が描いた絵をプレゼントして、またいつか出会えるときに美裕の父親が描いたより上手い美裕の絵を描けるようにと約束して。

いつかきっとまた、出会えることを約束してた。

それが、今、かなつたんだよな。

美裕。

俺、まだ美裕のお父さんのようには上手くかけないけれど、これからもひとつがんばって美裕を描くからな。
絶対……。

不安

美裕の瞳のことを見つめて、一週間が過ぎた。
あれから俺たちは今までと変わりなく過ごしていて。俺の絵もちゃんと描けてきている。もうすぐコンクールがある。このままいくとコンクールに入賞間違いなしだらう。先生からもお墨付きを頂いている。俺も自信を持っている。

これもみんな美裕のおかげだよな。ほんと。

今日もまた、俺たちはお互いに向かい合って絵を描いている。眼鏡を取り、緑色の瞳を俺に向けている美裕は、本当に綺麗だ。伊達とはいえ、眼鏡をかけている美裕もかわいいけれども。ああ、俺、こんなかわいい女の子の彼氏なんだよな。いつも思つけど、本当に嬉しい。

「ねえ、大樹」

「ん? なんだい?」

「あさつての日曜日、どこかに遊びに行かない?」「えつ?」

「あのね、学校でこうして話したりしていたけれど、二人でどこかに遊びに行かなかつたよね。だから、休みの日にどこかに行くのもいいかなつて思ったの」

「そうだな。そういうのもいいかもしれない」

今まで休みの日に女の子を誘つて遊びにいくなんて、想像しただけで恥ずかしくなつてしまつたから出来なかつたのだ。

でも、美裕とだったら、それも関係ない。

「うん。それじゃ、あさつてね」

「あ。でも」

「なに?」

「俺、美裕をつれていけるような場所を知らない

「くすつ。そんなの何処でもいいよ」

「でもなあ……。何処でもいいって言つてもなあ。俺はいつも胡太郎と出歩いていたから男っぽい所しか知らないし……」

胡太郎とよく行くゲーセンとかに連れて行つても、美裕は楽しくないだらうし……。

「それじゃあね、公園でも行かない?」

「公園?」

「うん。駅の向こうにある木がたくさん植えられている、ちょっと大きな公園」

「ああ、えつと、そこは寂蒔公園といったかな。そこだよね。うん、いいね」

「わたしね、風景も描いてみたになつて思つたの。お父さん、あそこで風景画をよく描いていたし」

「そうか。絵を描くか。そういうこともできるつてことか。別に深く考える事もなかつたんだな」

「あ。もしかして大樹、今変な事考えていたんでしょう?」「えつ? あ、あはは。そんなことないつて」

「もう。大樹つてえつちだよね」

「ちょっと待てよ美裕。そこまで俺は考えていたわけじゃないぞ」「ふーん」

遠くで俺を見ているみたいな目で俺を見る。いぶかしんでる……。

「本当だつて」

「それじゃ、そこまでつて、どこまでなの?」

「……つ」

「くすつ。やつぱり大樹つてえつち」

「もう、美裕、いじわるだな……」

「くすつ。だつて大樹面白いんだもの」

「あー。また俺をからかつたんだな」

「くすつ。ごめんね」

「でも、正直に言つと、本当はちょっとだけ思つてたかな」

「えつ? そうなの? それじゃあいこよ。大樹だし」

「えつ？ ほ、本当に？」

「くすつ。もう、大樹はー」

「あはは。でもほんと、外に出歩きたいよな。最近天気もいいし」

「それじゃ、あさつてね。わたしおべんと作つてくるね」

「ほんと？」

「うん。だから、午前中からいー」

「よし、それじゃ、明日の為に今日まじねくらじにして帰らうつか」

「もう。大樹。行くのは明日じゃないよ。まだ明日一日あるんだよ」

「あ、そうか」

「くすつ……」

ああ、美裕はほんとかわいいな。

あさつてか。今日のよひの日に晴れるといいな。

わくわくしていると一口が経つのが早い。他の事を考えないでそのことばかり考えているからすぐに時が経つような気がしてくる。いよいよ明日は美裕と遊びにいく。美裕と休みの日に出かけるなんて初めてだ。いや、女の子とこうして出かける……デートをするつてこと自体初めてなわけで。否応なしにドキドキしてくる。

「そうだな……明日はどんな服を着てこうか。制服なんて着られないし……うーん」

こんな事なら胡太郎と出かけた時にもうと服とかを買つておけばよかつた。

ああ、俺余計な事を考えてる。まったく、かわいい彼女がいると変に舞い上がってしまうんだな。別に普通にしていればいいじゃないか。いつも会っている美裕なんだし。

まあ、かわいい彼女の為にかつこいい彼氏を演出したいとも思つけれども、なんだかそういうのは俺の性にあつていないうつな気もする。

「そつだ。今度美裕に俺の服を選んでもらつとかしよつ。美裕が俺に似合つてゐるつて言つて服を着ればいいんだし」

「そつと決まれば、明日着ていくのは無難なところで比較的俺の気に入つてゐる服を選ぶ事にした。」

「で、明日公園の後はどうしよう。」

「うーん、最後はやつぱり俺の家に来ないか、かなあ。それじゃ、ちゃんと家のなかを片付けておかないと……」

「部屋を見渡しながら俺は家中をうろついた動き回る。」

「リビングと俺の部屋を片付けて……」

「俺の部屋か……。」

「俺の家に来るつてことは俺の部屋に美裕が来るんだよな。俺の部屋に、美裕と俺のふたりだけ……。」

「……」

「なんだか想像してしまつたら、ドキドキして顔が赤くなつてきた。つて、俺は何を考えているんだよ。まつたく、胡太郎の言つていたことなんて気にする事ないんだし。」

「ああ、でも、楽しみだな。明日、美裕はどんな服を着てくるのかな。だいぶ初夏の陽気になつてきたから、薄着かな。」

「美裕は結構スタイルいいしなあ……。」

「手足や腰は細いし、それでいて出でているといつまちちゃんと出でいるし……。」

「ああ、俺はあの子を抱きしめたんだよなあ……。」

「美裕、結構胸大きかったんだよなあ……。」

「……」

「つて、変なことを想像したらだめだつて。」

「はあ。やつぱり俺、えつちなのかも」

「どうも家の中にはいつもやもやして仕方がない。買い物も兼ねて少し出かけよう。食料品とかはもう底をついている。」

「外に出る仕度をし、外に出たら、あたりはもう真っ暗になつた。時計を見ていなかつたので失念していたが、いつのまにか遅く

なつていたようだ。

こんな事なら先に買い物を済ませておけばよかつた。

明日の事に舞い上がりつて俺は何をやつていいのだか。

半分小走りで近所のスーパー等に行き、食料品やらを買い込む。

「お二ど 明田なはか役は立つよ」なせのを聞くでおいたほんかいいかな……」

つこでに、出かけるときに役に立ちやうな日用品や雑貨を、買つておいた。

両親が亡くなつたとき、俺に両親からの多額の保険金やら慰謝料やら遺産やらが入つてきたので、俺が社会に出て稼ぐようになつて、しばらくは食べていけるだけのお金はある。税金とかで大分減つてしまつたけれども、ひょっとしたら一生働かなくても生きていけるだけのお金があるかもしない。こんなお金なんかあつても、とも思うけれども、俺が生きていく上ではやはりお金は必要だつた。だけど俺はつまらない事でこのお金を使いたくなかつた。いつも必要最低限の生活ができるお金だけを使つようにしていた。自分の変な欲望から出た余計なものなど一切買つていない。

日本語の発達と文法

買い物を済ませ、夜の街並みを歩く。

そうしたら、ふと思い立つた事が出来た。

「明日、美裕と行く所を見て帰るうか」

美裕が行こうと言つていた寂蒔公園は、ここからさほど遠くはない。ただ、俺の家からは結構距離がある。まあ、俺は一人暮らしだし、遅くなつても誰かにはばかる事はない。

さすがに人影が少ない。こういう公園にいそうなカツプルもまばらだ。もう少し季節が進むともっとたくさんのカツプルが出歩くところだろうが、まだ夜は少しだけ肌寒い。いろいろな場所だからつて言つても、なかなかこんな時間に出歩こうなんてそんなには考え

ないらしい。

おかげで、目の居所に困る」となくこの公園を一人で歩く事が出来た。

「そういえば、よくここで遊んだ思い出があるな……」
美裕と遊んだ記憶は少ないが、胡太郎と遊んでいた記憶はたくさんある。

歩いていたら、公園の遊戯台が置いてあるところに出た。
砂場や、ブランコ、滑り台、シーソーなどが夜の電灯に照らされて寂しそうに佇んでいる。

そんな公園の遊戯台達は、思ったより小さくなっていた。
「なんだか、懐かしいな……」

そんなことを思いつつ、そこを通り過ぎて公園の池を取り囲む木々の茂った遊歩道を歩く。

「ん？ この辺なんか、絵になるかもしない」

俺は薄暗い景色を両手の人差し指と親指で長方形を作り、そこから覗く。

右には池があつてなかなか趣がある。ベンチもあるしここで座つて描くのもいいかもしない。

よし。明日、この辺で美裕と絵を描こう。きっといい絵が描けると思う。

「明日、楽しみだな……」

一通り公園をまわり、公園を出ようとしたとき、ふと、一組のアベックに目が行った。

さつきまでに見ていたカッフルとかだつたら氣にも止めなかつたのだが、何か口論しているようだつた。それに、その二人は俺の知つているような二人だつたので気になつた。

「あれ……。あの二人は」

少しだけ近づいてみる。薄暗くて遠くがよく見えないが、この位置からでもその二人が誰なのかはつきりとわかつた。

「胡太郎と……美裕？」

二人は街灯が照らす下で話し合つてゐる。

「何を……話しているのだろう？」

俺のいる所までは一人の声はほとんど届いてこない。それに俺の周りは暗いので、俺がここにいる事は一人には気がつかないはずだ。でも、なんで俺はここで一人を見ているだけなんだ？ 近づいてその一人と話してもいいじゃないか。あの一人とは俺がこうして変なふうにはばかる間柄ぢゃない。

しかし、何故かここから一步も踏み出せなかつた。あの一人に今会うことが自分にはできそうになかつた。

ただ、きっとたまたまこの公園に来た美裕と胡太郎がばつたり出会つただけなんだろう。それだけだ。そう思ひたかった。

でも。

こんな時間。しかも俺の近所にある美裕の家はもとより、胡太郎の家もここから結構距離がある。来ようと思わなければ来れるところではない。

そうすると、どちらかが「こ」に呼び出したと「う」とになるのではないだろうか。

そうだとすると、何のために？

今話していることは俺に聞かれては困るような話なのか？

一人だけになつて話さないとだめな事なのか？

それは、一体、どういうことなんだ？

二人はずつと何かを話している。

時々かすかに俺の名前を言つてゐる美裕の声が聞こえてくる。気になる。

でも、それでもどうしてもあの一人に声をかけることが出来なかつた。

やがて、胡太郎と美裕は並んで公園を出て行く。

ついていくか、このまま帰るか、どうしようかと逡巡したが、美裕も胡太郎も俺に隠し事をするような一人じゃないし、何かあるのだったら明日美裕が話してくれるはずだ。

そう思い、俺は帰ることにした……。

しかし、家に着いても、あの一人の事が気になつて仕方がない。
この気持ちはなんだ？

この嫌な気持ちは一体何だつて言つんだ。

俺はあの一人を信頼している。

胡太郎は幼なじみで、俺をよくからかつたりするが、それは俺を
楽しませようとするもので、決して悪意はない。胡太郎は俺にかけ
ひなたなく接してくれて、隠し事なんてお互にすることもなかつた。
心からの親友だつて言える。

美裕は俺のことを好きだつて言つてくれたし、俺も美裕も今でも
お互に何でも話せる。

なにしろ、美裕は俺の彼女なのだから。

それなのに、どうして俺に何にも言わずに一人でいたんだ？
ただ一人で話をしていただけならいいわ。

でも、なんでこんな時間に、あの公園にいなくちゃいけないんだ？
わからない。美裕も胡太郎もあの公園に行くなんて話をしていた
かった。

どうして俺だけのけ者なんだ？

ああ、なんだかもやもやしてこの気持ちは嫌だ。

そうだ、電話をしてみよう。

あれからしばらく時間が経っているのだから、美裕も胡太郎も家
に帰つているはずだ。

美裕とは電話でよく話をする。それを口実にちょっと訊いてみれ
ばいいんだ。さっき公園で美裕を見たけど、行つていたのか？つて。
ふるるるる。

美裕に電話をかけてみたが、電話に出ない。

ふるるるる……。

おかしい……。

今度は胡太郎にもかけてみた。

胡太郎は携帯電話を持っている。電話に出ないなんてことはないはずだ。

「ふるるるる……。

ふるるるる……。

がちや。

出た。

『はい、吾妻胡太郎です』

「あ、胡太郎か？俺だよ」

『ああ、すまないな。今俺ちょっと電話に出ることが出来ないんだ。ごめんな。また後で絶対かけなおすから名前をよろしく。このあと発信音が出るから……』

「留守番電話……？」

「どういうことだ？」

「一人とも電話に出ないなんて。ますます不安になつていく。

胡太郎と美裕が夜に一人だけでいる……。

何をしているんだ？

どうして俺に何にも言つてくれないんだ？

ああ、こんな気持ち嫌だ。

でも、俺はどうしたらいい？

どうすればこんな嫌な気持ちを無くせるんだ？

「……」

一度大きく深呼吸した。

「ばかだな、俺。」

そんなことを考えて、いつも優しく俺に接してくれている一人を疑うなんて、俺はなんてひどいやつなんだ。

美裕が電話に出られないのはお風呂に入っているとかからかもしれないし、胡太郎はいつものように女の子といふから電話を切つて

いるだけなのかもしない。

大丈夫だ。あの二人が、俺をのけ者なんかにしたりはしない。
それだけは信じられる。絶対だ。

明日美裕と遊びに出かけるんだ。その時に訊けばいい。
きつとたいしたことじゃない話になるだけの事だ。

俺のいつもの日常がいきなり壊れてしまうことなんて、もうない
はずだ。

もう、一度と。

次の日。

でも、俺はほとんど疲れなかつた。

明るくなつて来たときから聞こえてきた音が、疲れなかつたための朦朧としている俺の頭を覚まさせる。

ザ 。

天気と言つヤツはどうしてこいつ俺の思いを裏切るんだ？
その雨は激しく降り続いていた。

早朝からやつてゐるテレビの天気予報を見ても、梅雨のはしりが始まつたとかで、今日一日はまづと雨といつことを何処も口をそろえていた。

雨といつ憂鬱な景色も俺の心を重くさせた。とても絵なんか描けるような天気じゃない。

「美裕は……。もう起きているだらうか」

普段学校に行く為に起きる時間。

俺は美裕に電話をかけようとした。受話器を持とうとしたそのとき。

ぴろぴろぴろ。ぴろぴろぴろ。

気が抜けるような家の電話のコール音。逆に電話がかかってきたようだ。

「美裕……かな」

がちや。

「もしもし。森村です」

「……、ああ、大樹か」

「胡太郎？」

「起きていたか？」

「ああ。大丈夫。起きていたよ。どうしたんだ？こんな朝早くから声が小さく元気がない。なんだかいつもの胡太郎の声じゃない。」

本当に「どうした」と聞かれた。思い出したくなのに昨夜の事を思い出してしまう。

やはり美裕と何かあったのだろうか。

嫌な気持ちが膨らむ。

「この雨の中すまないが……。ちよつと用ひきて俺と話をしてくれないか？」

「どうしたんだよ胡太郎。お前らしくない。電話じゃダメなのか？」

「ああ。どうしても会つて話をしたい」

「でも、俺、これから美裕と約束がある」

「その……、霧沢さんのことだ」

「えつ？ どういうことだ、胡太郎」

「電話では言いたくない……。だから会つて話をしてくれ。頼む」

「……」

「頼む」

「……わかった。何処に行けばいい？」

「なあ、あの公園……、覚えているか？」

「昔遊んだあの寂時公園のことか？」

「そうだ。俺は、そこに行くから」

「今からか？」

「ああ。頼む」

「わかつたよ」

「すまないな……」

「ああ」

「それじゃ」

「ふつつ。つー、つー、つー……。

美裕のことで話があるってどうこういとなんだろう……。
やはり昨夜のことなのだろうか。

それならちよつといい。胡太郎に訊けばいい事だ。
でも。なんだろう、この嫌な緊張感は。

あんなふうに真面目ぶつた口調の胡太郎の声を聞くのは初めてだ

からか？

「くそつ……。もう嫌だつてのに！」

これから胡太郎に会いに行かないといけなくなつた。美裕に一応電話を入れておいたほうがいいか……。

美裕が胡太郎と何かあつたにせよ、昨晚のことは俺は知らないことなのだから。

数分逡巡した後、俺は美裕に電話をかけた。

「ふるるるる……。
がちや。

「はい、霧沢です」

よかつた。今度は出でてくれた。美裕の柔らかい声に少し安心する。

「ああ、美裕か？俺だよ」

「あつ。大樹……」

「なあ、今日雨降っちゃつたな」

「そうだね……」

「なんだかいつもの元氣がない。

「どうする？美裕。今日は絵を描けそつにないよな。せつかく美裕とのデートなのにこの雨はないよな」

「どうするも、俺はこれから胡太郎に会いに行くといつのに。何を美裕にこまかしているんだ、俺は……。

「……」

でも、美裕は何にも言わず、ただため息のよつたな声が聞こえただけだった。

「美裕？」

「……。ごめんね大樹。今日ちょっと具合が悪くなっちゃつて」

「えつ？具合が悪いって……。美裕、大丈夫か？」

「ううん。でもたいしたことないから大丈夫だよ」

「本当か？」

「うん。大丈夫だから」

「そうか……。それじゃ、仕方がないな。雨も降っちゃったし、今日は取りやめにするか」

「うん……」「ごめんね」

美裕の声が聞き取れないほどに小ささい。

「美裕、本当に大丈夫なのか？」

「うん……。大丈夫だから。明日は学校にいけるから」

「本当だな？本当に大丈夫なんだな？」

「うん……。心配かけてごめんね、大樹」

「そうか。それならいいんだ」

「うん。」「めんね、今日」

「いや、今日は雨の所為にするから。美裕はゆっくり休んで。機会があればまた来週にでも行こう」

「うん……」

「それじゃ、暖かくしてな」

「うん……」

美裕の家に行つてやりたいと思つぽく切ない声を出して。

「……大樹」

「ん？なんだい？」

「ごめんね……」

「えつ？なにが？」

「ううん……なんでもない」

「そうか……それならいいんだ」

「うん……。それじゃ……ね」

「ああ。無理はしないでな」

「うん……。今日はほんとにごめんね大樹……」

「気にするなつて」

「うん……。ありがと」

「もう切るな」

「うん……」

「それじゃ、またな」

「…………大樹。うん」

がちや……。

重い受話器を置いた。

「美裕……」

美裕は具合が悪いって言つていたけれど、元気がない。といつよ
り泣きそうな声をしていた。

やつぱり胡太郎と何かあつたからなのだらうか。

くそつ。何かつてなんだよ！

それも、胡太郎と話ができれば何かわかるはずだ。

俺は不安を胸に抱き、胡太郎が待つ公園へと向かった。

ザ
。

嫌になるほど雨が酷く降り続いている。

こんな激しい雨を今日に限つて降らせることなんかないのに。最近はほとんど雨らしい雨なんて降らなかつたのに。なんで今日に限つて……。

くそつ。

俺はなにを八つ当たりしているんだ。

夕べ来た道を小走りで抜けて、やがて公園に着いた。公園の中に入り、昨日一人を見た辺りへと向かう。理由はない。そこにいるような気がしたからだ。しかし、やはり胡太郎はそこにいた。

雨の中にひとりぽつんと佇んで。

「よう……早かつたな」

「胡太郎……」

胡太郎も傘をさし、元気のない表情を俺に向けていた。こんな胡太郎の表情を見るのは初めてだ。

「すまないな。こんな雨の中、こんな所に呼び出しても」「そんなことはいい。それよりも話つてなんだよ」

「……」

「胡太郎？」

胡太郎は俯いて、傘で顔が見えなくなつた。

「あ、ああ。すまないな。俺もなかなか話し出すのに苦労してな」「どうしたんだよ」

「……あのさ」

しばらくして、胡太郎は俺に向く。

「なんだよ」

「あのさ、大樹。俺、お前に一つ謝らないといけない事がある」「

「なんだよ。謝る」といつて

「……」

押し黙つて、いつもよく話をする胡太郎じゃないみたいだ。

「胡太郎……」

「……少し歩かないか?」んな雨だけど」

「おい……」

「な、頼む

「……。わかつたよ」

俺たちは何も言わず、公園を歩く。

懐かしい、昔胡太郎とよく遊んだ景色。そこを俺たちはゆっくりと横切つていく。

昨日、ここで絵を描いたらいい絵になると思つた景色のところので、胡太郎が立ち止まつた。

「じつはそ、俺……」

「……」

「俺も……。霧沢さんに惚れていたんだ」

「えつ? なんだつて?」

「俺も、霧沢美裕つていう女の子のことが好きだつた。それも、ずっと昔から……」

「どうこういふことだよ、それは」

「大樹。ここで俺たち、よく遊んだよな……」

「胡太郎」

「まあ、俺の話を訊いてくれよ」

「……」

「ここでさ。昔、俺とお前が出逢つたつてことは覚えてるか?」

「ああ。なんとなく」

「あのや。どうして俺の家から」んなに遠いこの公園でお前と出逢つたと想つ?」

「えつ？ そんなことを言われても、俺にはわからない」

「そうだよな……。実は、さ、俺、お前と出会う前に、たまたまきていたこの公園である女の子を見つけたんだ」

「えつ？」

「その女の子は、いつもここで数人の男の子にいじめられていたんだ。その子はどうしてここに来るのかはわからなかつたが、いじめられても毎日ここに来ていたんだ」

「俺はその女の子の事が気になり、ここまで毎日来ていたんだ。そして、俺はその子を見るたび、話し掛けでみよつと何度も思つた。でも、そのときにいつも数人の男の子達が現れて、その子をいじめて、女の子は逃げるよつにして公園からいなくなつてしまつたんだ」

「そんなことが続いていたある日、一人のいつもいじめている男の子とはちがう男の子が現れたんだ。そして、その男の子はいじめられていてる女の子を助けて。仲良くなつていつた」

「それつて……」

「その女の子を助けた男の子つていうのが大樹、お前だつた」

「……」

「その日から、その女の子はいじめられなくなり、その変わりにその男の子とよく遊ぶのを曰にするよつになつた」

「正直、俺は複雑だつた。その子が楽しそうに笑顔でいる事が嬉しかつた反面、あの時、俺が助ける事ができれば、あの子は俺とあんなふうに遊んでくれるんだつて思つて。今ならわかる。その気持ちは、あのときのお前に嫉妬と羨望の感情を抱いていたものだつてこどが」

「胡太郎……」

「そのうち、その女の子を見なくなつてしまつた。ただ、お前一人でぽつんとベンチに座つている姿を見るだけになつた」

「……」

「そのとき、俺は思つたんだ。この男の子と仲良くしておけば、いつかあの女の子に出逢えるかもしないと。そして、お前と……。大樹とここで遊ぶよくなつた」

「そんな……」

「すまないな。最初は本当に俺はそう思つていた。でも、お前といふつちにあることを知つたんだ」

「あること?」

「お前がすごくいいやつだつて事だよ」

「えつ……」

「そう思つたら、俺にあの時あの女の子を助けられなかつたのは俺の所為だつて。あの女の子が大樹と楽しそうに遊んでいたことも大樹がいいやつだからつてことに気がついたんだ。あのときあの女の子を助けられなかつた俺なんかが、あの女の子と仲良くなれるはずがなかつたのさ」

「だから、俺は、全ての女の子に対して優しくしようと思つた。女の子にかつこいい男の子だつてことを示したかつた。影で努力して、勉強もして。もてる男を演出していたんだ。お前に負けたつていう負い目を糧として、いつか戻つてくるあの子が俺を見て、お前よりもいい人なんだつて思つて欲しくて」

「でも、それも……その女の子のことなんて、何年も経つて、どうでもよくなつてしまつた。大樹は、俺のライバルでもあつたし、何でも話せる相手だつた。大樹といふ事は俺にとつてもすごく楽しかつたんだ。なにしろ、大樹は俺のかけがえのない友人となつていたのだから」

「胡太郎……」

「でも、それも、突然霧沢さんが戻つて來た事で、俺は当惑した。俺は本当は覚えていたんだ。成長しても、霧沢さんがあの子だつて、

すぐにわかった

「でも、霧沢さんは俺のことなんか知らない。それに大樹のことを見ていいようだつた。無理もない……」

「でも、日に日にお前達が仲良くしているのを見るつちに、あの時の嫌な気持ちが出てきてしまつて……。自分が嫌になつてきた」

「……いや。違うな。昔のそのことの所為じゃない。そうしたいつて思つてやつたんぢやない。でも……同じことを俺はしてしまつたんだ」

「えつ？」

「大樹も知つてゐるようだ、俺にはいつも言い寄つてきてくれる女の子がいる。でも、そいつらは大抵、俺の外見しか気に入らなくてな。本当の俺を見てくれなかつた。俺の外見がいいとか頭がいいからとで彼氏にすると箱がつくからとか、俺がもててているようだから自慢できるとかの目的で近づいてくるやつらばかりでさ。でも、最初の頃から俺はこんなふうに女の子にモテたいつて思つていたから、俺もいい気になつて、そんな女の子達を口説いてつきあつたりもした。でも……。だからかも知れないけれど、俺は本当に相手を好きになるつてことを知らなかつたんだよな」

「それを教えてくれたのが霧沢さんだつた。霧沢さんは大樹に好意を寄せてゐる、それも本当の好意を。いつも俺を見ている女の子達とは違う感情をいつも大樹に与えていた。だから、俺はそんな霧沢さんに惹かれた。お前をうらやましく思つた。俺も、霧沢さんのような女の子に好かれてみたいつて。お前のように霧沢さんに愛されみたいつて」

「大樹があんなに不幸な目に会つて。それでもようやく楽しそうに

なってきたつていうのに、その大樹を楽しそうにしてくれたのが霧沢さんだったことをわかっていても、俺のこの気持ちだけはどうしようもなかつた……。ははっ。いつも女子の子とよろしくやつている俺がだぜ

「だから、昔を思い出したことを理由に昨日……霧沢さんをここに呼び出したんだ」

「呼び出して……。今大樹に言つたことを伝えた。そして、霧沢さんのことを好きだつて言つた。霧沢さんがお前のことを想つていても、言わずにはいられなかつた」

「それで……彼女はなんていつたと思つ?」

美裕なら……。

「……。大樹。俺に、霧沢さんに何も言わないのかよ

昨日美裕に胡太郎が言つていた情景を思い出す。
いや、見なくてもわかる。

美裕なら、胡太郎が美裕のことを想つているつて事を知つても、心を痛めても断るだろうと。

俺ももし、他の女子にこんなふうに好意を打ち明けられても、絶対そうするのだから。

「くそつ……。お前ら、本当につらやましいぜ。俺が霧沢さんにこんな事を言つても、お前は霧沢さんが俺にそんな気持ちを向けてないつてことを信じているんだな……」

「胡太郎……」

「わかつていいるさ。謝りたいのはそのことなんだ。すまなかつた。俺、親友のお前が愛した女性に横恋慕して……。彼女を、お前を傷

つけてしまった。本当にすまない。……」

「胡太郎……。俺さ、昨日の夜、お前が美裕と何か話していたことは知っていたよ」

「えつ……」

「昨日、たまたま……通りかかって。そうか、そういうことだつたんだな」

「そうか……。おまえ、ここに来ていたんだな。それでも、俺たちの間に入つてこなかつたなんて。お前……」

「すまなかつた……」

「胡太郎……」

「大樹は俺たちのことを本当に信頼していくれたんだな……。本当にすまない。大樹。俺を殴つてくれ。俺はお前のそんな気持ちを考えず自分だけのことを考えてこんな事をした」

「胡太郎……。俺がお前にそんなことできるはずないだろ?」

「大樹……」

「誰かを好きになるつてのは自分じゃコントロールできないものだろ?誰にも責められるものじゃない。別に胡太郎が美裕のことを好きになつても、それは仕方がないさ。だつて、美裕はあんなにかわいいし、美人だものな。性格も優しいし、尽くしてくれる。ああ、でもだからつて、もう手を出すのは止めてくれよ。胡太郎が相手だと美裕がいつ俺を捨ててしまうかわからない」

「くつ……あははは……。こいつめ、のろけやがつて」

「えつ?のろけだつたか?」

「大樹……。やつぱり俺はお前には勝てないな」

「そんなことはない。胡太郎もいいヤツじゃないか。俺が一年前、あんなことになつても、氣を使って、いつも毎日を過ごさせてくれた。そのおかげで俺はどんなに助かつた事か……。胡太郎は俺の親友だよ。本当に」

「大樹……」

「なんだよ、胡太郎」

「俺……、お前の親友でいいのか?」

「つて、胡太郎が友人でなくなつたら俺に友達と言える人ががいなくなる」

「くつ……あははは。そうだな。俺もだ」

「だろ?」

「大樹……。すまなかつたな」

「ああ。だからもうそのことはいいよ」

「ありがとう……。大樹」

「ああ。でもその前に胡太郎。一つだけ訊きたい」

「……ああ」

「どうして、お前がそんなことを今言つようになつたんだ?…どうして、わざわざ仲良くなつた俺たちの間に入ろうとしたんだ?…いつものお前なら、そんなこと考えてもしなかつたはずじゃないか。いつも胡太郎なら……。冗談で済ますような話じゃないのか?それをわざわざ俺たちに嫌われるような事をして……。どうしちやつたんだよ?…一体」

「……」

「胡太郎?」

「……すまない、大樹」

「どうしたんだよ」

「俺……やつぱりお前には隠し事が出来なかつた」

「胡太郎?…どうしたんだよ」

「俺……。俺さ、今月末で転校する事になつてしまつたんだ」

「えつ?…なんだつて?…なんでそんなことを早くに……」

「すまないな。俺も知らされたのは昨日なんだ」

「昨日……」

「だから……この気持ちのしこりを残したくなくて。いや、あの時に霧沢さんを助けられなかつた俺の弱みを霧沢さんに晴らして欲しくて……。断られる事を願つて……。そして、お前達に嫌われよう

と思つて……。大樹にはもう別れるつていう辛い思いをさせたくない
かつたから……」

「胡太郎……」

「いや、すまなかつた。こんなことで、俺は霧沢さんにも辛い思い
をさせた。お前からも俺が謝つていたと、言つておいてくれ
「そんなことはいい。本当におまえ、転校してしまつのか？」

「ああ……。本当だ」

「そんな……」

「大丈夫だ。俺も大樹とは親友だ。機会があればいつでも逢えるさ

「そうだな。そうだよな」

「ああ……」

ザ 。

雨が降つてゐる。

今まで雨の音を忘れていた。

気が重い雨も、少し気を使つてくれていたのだろうか。

「……それじゃ、大樹。俺はこれで帰るよ」

「胡太郎……。なあ、これからどこかに行かないか？昔の……いつ
ものように」

「ばかを言え。俺は霧沢さんに辛くしてしまつたんだ。お前のこと
を想う霧沢さんの気持ちを踏みにじるようなな。霧沢さんは優しい。
俺の気持ちをよく知つて考えててくれている。だから彼女、だいぶ思
いつめているはずだ。俺のこととお前の事で。その為にお前はこれ
から霧沢さんに逢つて、話をしないとダメだからな。そうでないと、
もう俺は霧沢さんに顔を合わせられない」

「胡太郎……」

「なんだよ、不肖の弟子。俺とどこかに遊びに行くつていうのなら
少なくとも大樹が霧沢さんを抱いてからでないとナ」

「胡太郎！」

「ははははは。冗談だよ。お前らはもう誰かが何かを言つても壊れ

ない絆なんだから。俺が言つんだ。間違いないわ」

「胡太郎……」

「俺が言えた義理じゃないんだが……。霧沢さんを幸せにしてやるんだぞ。俺の分までもナ。彼女、お前と同じなんだから」

「……」

胡太郎も、知つていたのか……。

「本当にお前ら……。いや、もつといい。わあ、早くいけよ」

「胡太郎……」

「すまん、親友。俺、不器用で」

「胡太郎……」

「また明日、学校でナ」

「ああ！また明日、胡太郎」

ぐつと親指を伸ばし、俺に合図した胡太郎。
俺も、胡太郎と同じ事をして……。公園を出た。

赤い傘

雨の中。

俺は一人で街を走る。

見慣れた景色。

この街並みと、ずっと胡太郎と遊んできた。
でも、もう、これからはあいつとは一緒にいられなくなる。
でも。

胡太郎とは親友だ。

そんなことで今生の別れになるなんてこともない。
それよりも。

今、美裕に出会つて、そのことを伝えなければ、また胡太郎と交
えたこの3人で仲良くやつては行けなくなる。
そうお前は言いたかつたんだよな、胡太郎。
俺の家の前に着く。

そこに……。

美裕がいた。

赤い傘をさして、俺の家の門に寄りかかるようにして佇んでいる

美裕。

美裕もきつとわかつていたんだ。

だから、ここで、俺を待つていたのだろう……。

「美裕」

「……大樹」

美裕は俺に緑の瞳を向けて。

「俺、胡太郎に会つてきたよ」

「吾妻君に……」

「胡太郎、美裕に謝つておいてくれつて」

「吾妻君……」

「それでさ。胡太郎、今月で転校になるんだって」

「えつ……？」

「それで……美裕に昨日あんな話をしたんだってさ」

「……」

「美裕もてもてだな」

「ばか……」

「なあ、美裕。俺より胡太郎がよかつたら、美裕は胡太郎を好きになつてもいいんだぞ。胡太郎は俺なんかよりよつぽどかつこいいし、女の子には優しいだろ？」

「大樹。わたしは大樹が好き。誰に好かれようと、他の人に優しくされても、わたし、大樹の事だけを想つてる」

「美裕……」

「吾妻君はいい人だけど、わたしの好きな人は大樹しかいないから。だから、わたし、吾妻君に断つたの……」

美裕に、こんなにまで。俺は……。

「それとも、大樹は、大樹はわたしのこと嫌なの……？」

「そんなばかな事があるか。俺は美裕のことをが好きだ。本当に愛している。親友の胡太郎でも美裕に酷い事をしたら、なにをしてしまつかわからぬいくらいに。ただ……。美裕が幸せになるつていうのなら、俺じやなくともいいって……思つただけなんだ」

「大樹は……。わたしのこと、幸せにしてくれないの？」

「俺でよかつたら、美裕が俺でよかつたら、死ぬ氣で一生美裕を幸せにしたい」

「本当？」

「当たり前だ。俺にはもう美裕がいないと、生きている甲斐がない」

「大樹、わたしも、そう。わたしも大樹といつしょにいないと、わたくしじやなくなつちやうから……」

「美裕……」

「でも、ごめんね、大樹……。わたし、ほんのちょっとだけ、吾妻君の気持ちもわかつて……」

「ああ。俺もわかる。この美裕のことが好きだつていう気持ちを、

あきらめないと云はなければ、辛いものな

「……」

「本当は、胡太郎、美裕に昨日そう話して、自分のわだかまりみたいなものを溶かそうって思つたんだって。昔の美裕への負い目を無くしたくて、そう言つたんだって」

「吾妻君……」

「だからさ。もう大丈夫だよ。胡太郎は優しいやつだし。また明日学校ではいつものように馬鹿な事を言つてくるさ。だから、もう、胡太郎のことは大丈夫だ。そうするあいつの気持ちも、わかつて欲しい」

「本当?」

「ああ、本当だ。俺たちは親友だからな。よくわかるぞ」

「くすつ……。そうだよね」

「だからさ。俺。胡太郎の分まで美裕を幸せにさせてくれないか? 実は、胡太郎にもそう頼まれた。そうすれば胡太郎も俺たちのことを認めてくれるさ」

「本当?」

「ああ。美裕がいやだつて言つまでな」

「くすつ。それじゃ、本当に一生だね」

「そつか」

「あ。でも」

「ん?」

「大樹も幸せじゃないと、わたしは幸せになれないよ」

「大丈夫だ。俺は美裕がそばにいてくれれば、ずっと幸せになれる」

「本当?」

「ああ。絶対」

「うん……。絶対」

俺を見つめてくれる美裕の緑色の優しい瞳。

その美裕の唇に、俺の唇を触れさせす。

冷たい雨の中。

それでも美裕は暖かかった。

「なあ、美裕」

「なに……」

「俺の家に入らないか？こんな雨の中だ。家で色々話したい」

「……いいの？」

「彼女を自分の家に入れない彼氏があるか

「くすっ……。そうだね」

「あ、それじゃ、ちょっとまつて」

「ん？ どうしたんだ？」

「お昼ね、大樹に作つてあげようと思つて。本当は昨日から材料を用意していたんだ。それを取つてくる。お弁当じやなくなつちゃつたけど、大樹に料理を作つてあげたいから」

「そうか？ それは嬉しいな。喜んでお願ひしたいよ

「くすっ。うん。それじゃ、ちょっとまつていてね」

今日出かけることはかなわなかつたけれど、いろいろあつたけれど、これで、きっとこれからもいつもと同じ毎日が過ぐせる。よかつた。本当に。

美裕が傘をさし、家へと戻つていく。

美裕の家の前にあるその先の交差点。

あそこは日曜日になると車通りが激しくなる。

そんな為、なんとなく今一瞬不安になつた。

「あ、美裕、気をつけて……」

美裕に声をかける。

「えっ？ 大樹、何か言つた？」

美裕が振り向く。

その時だつた。

空気を切り裂くような高い音があたりに響く。

車の急ブレーキをかけたような音だ。

トラックがこっちに曲がってきた。

いや違う。曲がってきたんじゃない。

雨で濡れた道にタイヤを滑らせていく。

車体を斜めに傾きかけ、すごい勢いで滑つてくる。

そして、そのトラックは俺たちの方へと突っ込んできた。

「きやつ！」

美裕がトラックに驚き、立ちすくむ。

ちよつと、待て！

いや、考えている暇はない！

美裕はまだ俺の近くにいる。

俺は飛び出して美裕に飛びつく。

「美裕つ！」

「えつ！」

俺は美裕を後ろから抱きかかえて、トラックの迫る横へと飛んだ。

「きやつ！」

美裕の持つていた赤い傘が飛ぶ。

美裕の体を両手でかばいながら倒れ込む。

倒れ込んだそこには小さな街路樹が植えてあつた。

俺はその街路樹に頭を突っ込んだ。

鉄と石のぶつかるような大きな音がして、何か色んな破片が俺たちに降り注ぐ感じがした。

俺たちのギリギリ後ろでトラックが通過し、俺の隣の家に飛び込んだようだ。

「美裕！みひるつ！」

「大樹……」

俺の胸の辺りで美裕の声がした。

「美裕、大丈夫か！？」

「うん……、びっくりしたけど、わたしはなんともないよ……」

「よかつた……」

「大樹……。ありがと！」

「ああ、びっくりしたよな……」

俺から美裕が離れる。

「た、大樹！」

「えつ？」

「大樹、怪我してない？！」

「えつ？ 美裕？……どこだ？」

「気が付くと……。あたりは暗闇だつた。顔に手を当ててみると、ぬるつとする。

「大樹！」

「美裕……。あれ？」

「美裕が見られない。

手に纏わりつくぬるぬるするこれは、なんだ？雨じやない。なんだかすゞく生暖かいもの……。

「大樹……大樹！」

「えつ？」

「そういえば、なんだか顔が、頭がすゞく痛い……。

俺はどうなつてしまつたんだ？

「み、美裕……おれ……」

「たいき、たいき！たいきつ！……」

「み、ひろ……」

息ができないほど強烈な痛み。

痛みを感じたら、くらつと眩暈が襲つてきて、自分がなんだかわからなくなつていく。

俺は、立つてているのか倒れていいるのか。

グルグルと体が回つて、下へ下へと落ちていくような感じがして。

「たいき、たいき……」

美裕の声が、だんだん小さくなつていく……。

俺はそのまま、気を失つた。

それから、どのくらいの時間が経ったのかよく憶えていない。
気がついても、暗闇だった。

ちゃんと目が覚めているのに、目が開かない。

俺の目に手を当ててみると、何か布のようなものが巻かれていた。

「あれ……。俺、どうしたんだ？」

あたりを探ると、体の下にはやわらかい感触がある。
どうやら蒲団の上に寝かされていたようだ。
手探りであたりを確かめながら半身を起こす。
辺りがどうなっているのか確かめたいが、顔に巻かれた布が邪魔
で何にも見えない。

ここは何処なのか。

俺はどうなっているのか。

しばし、俺の今までのことを思い出してみる。

昨日の晩、美裕と胡太郎が公園で話しているのを見て。
次の日の朝、胡太郎から美裕が好きだつたつて事を聞いて。そう
したのは胡太郎が転校してしまつからだつて言つ事を聞いて。
そのあと、俺は美裕と逢つて、胡太郎のことを話して……。
えつと、それから、美裕が料理を作ってくれるつて言つて……。

「あっ！」

そういうえば、俺、さつき突っ込んできたトラックをよけようとして、
美裕を。

「美裕、美裕は大丈夫なのか？」

美裕を助けようとしたんだけど、その美裕は大丈夫なのだろうか
？ そのあたりの記憶からない。

くそ。この布がすくいまいまい。

美裕を見られないじゃ ないか。

でも、ここにでじたばたしてもどうにもならなーし、無理をするのも少しばかる。

目が見えないのなら、ちょっと耳を済ませてみよ。

遠くの方で、かすかな喧騒が聞こえる。

そして、かすかな消毒薬の匂いがした。

そうか、きっとここは病院なんだ。

この田に巻かれた布のようなものはきっと包帯かなにかなんだろう。

あれから俺が包帯を巻かれているあたりに怪我した所為でここに運ばれたに違いない。

それから、俺が今何か独り言を言つても誰も答えなかつたから、きっとここは個室なのだろう。

コンコン。

そのとき、俺がいる右の奥からなにかを叩く音がした。

扉を叩くような音。

誰か、来たのだろうか。

「はい」「
がちや。

「失礼します……。あ。森村さん、お田覚めですか？」

「えつと……。どちら様ですか？」

「はい。私はこの病院の看護師です。」

年配の女性の声だ。

「看護師さん……。つてことはやつぱりここは病院なんですか？」

「ええ。森村さん、先日の事故で田を怪我されてしまつて、こちらに運ばせていただきました。ご気分はどうですか？」

「あ、看護師さん。美裕は、あ、俺と一緒にいたと思つ女の子なんですけど、美裕は、美裕は大丈夫なんですか？」

俺のことはどうでもいい。ただ美裕のことが心配だ。

「みひろさん？ 女の子？ ああ、あなたを連れてきたあの子ね。ええ。大丈夫よ。一応検査は受けたみたいだけど、怪我はなかつた

みたい」

「本当に?」

「はい。でも、森村さん……」

「よかつた……。美裕が無事で……」

看護師さんが言つんだ、多分、間違いないだらつ。

全身から安堵の息が漏れる。

「森村さん……?」

「あ、そうだ。あの、俺、どうなつたんですか?」

安心したら、俺の怪我のことが気になつた。

早く無事な美裕を見たい。

「……」

看護師さんのため息のような音が聞こえる。

「看護師さん?」

「え、ええ、『めんなさい』ね。今担当の先生を呼びますから」

「え? はい」

美裕が無事なら、俺はそれでいい。良かつたと思つた。

しかし、それから医師の話を訊いたとき、俺は愕然としてしまつた。

「それは、『うつ』のことなんですか?」

「つまり……。細かい木の枝やとげ等が眼球にたくさん刺さつて横に流れた為、あなたの両眼にある水晶体が壊れてしまつたのです。その為、虹彩が傷つき、網膜が破壊され、眼球としましては……」

「あの、俺の両眼はどうなるのですか? また、見えるようになるのですか?」

そんな複雑な専門用語なんてどうでもいい。結論だけ言つて欲しい。

「……」

先生のため息が聞こえる。話したくないといつ意思が伝わつて来るようだつた。

「……あの、はつきり言つて下さつていいです。俺には両親とかの家族がいませんから」

「……。あなたの両目は……、残念ですが、もう見えるよつにはなりません。角膜の問題でもないですから、移植も無理です。失明状態となります」

「見えなくなる……」

「はい。他の怪我はたいしたことはなかつたのですが、……」

「そうですか、……」

「とりあえずは怪我が良くなるまでここにいてもらっています。そのあとケアなどはまたお話しします」

「はい、……」

その言葉を聞いても、なんだか現実感が無かつた。

だつて、この怪我の痛みはもつさほど感じない。このわざらわしい包帯が取れればまた今までのようになにに見えるような気がして、これからずつとこの闇の世界なんて信じられなかつた。

俺はあのとき、車をよけようとして美裕を抱きかかえたため、繁みに頭から突つ込んでしまつた。

そこにあつた木の枝が、俺の両目に刺さり、俺の両目がつぶされ、失明してしまつたのだといつ。

顔や他のところにそれほどたいした怪我が無かつたのに、どうして眼だけに……。

これから、俺は何も見えなくなつてしまつのか……。

これから絵を描くことができなくなつてしまつのか。

いや、そんなことどうでもいい。

一番嫌なのは、これから……。

あの美裕を見ることが出来なくなつてしまつたこと。

美裕……。

あの縁の瞳で俺を優しく見つめる美裕。

あの輝く笑顔で俺に話してくれる美裕。

その美裕が……見られないなんて。

「俺……。みんななくしてしまったのか……」
「ずっとずっとこの暗闇が続していくところのか。

怒りたくても怒る相手がない。

文句を言いたくても、何が言いたいかよくわからない。
あの時と、同じなのか……。

両親がいなくなってしまったことを実感した、あの嫌な気持ち。
あのとき、もう失うものなんてなにも無いと思っていたのに。
でも今、またあの時のように、突然失ってしまったなんて。

「……。嘘なんだろ……」

もうなんでもどうでもよくなつてくる。

胡太郎と遊んだこと。

絵を描いていたこと。

美裕を幸せにするんだって約束したこと。

そして、これからのこと。

なにもかもが、嫌になつてくる。

「嫌だよ……。嫌だよ。みんな……。なくなつてしまのは、嫌だよ……。こんな暗闇の中での、一人きりにしないでくれ。俺ひとりだけにしないでくれ。父さん、母さん、美裕……。どうして、どうして、俺……。どうして……。こんなことになつてしまつたんだよ……。せつかく……。せつかくこれから俺の大好きな美裕とずっといっしょにいられると思ったのに……。なんでだよ……」

いつしか、声を出していた。

今まで我慢してきた。

両親が亡くなつても。

一人きりになつても。

俺は、何とかやつていけると思つて、辛さを飲み込んできたのに。
それも……みんな、無駄だったのか……。

「ははっ……」

「どうか……、そうだ。

無駄だったんだ。

だつたら、もう、いいんだ。

もう、なんでもいい。

もう何にも考えたくない。

これからこのまま、生きて……いたくない。

もう、いいんだ……。

しばらく、一人放心していた。

遠くで何か音がしている。

でも、俺にはそんな喧騒なんて、もう関係ないことがだ。

何か外で起こっていても、俺には暗闇しか見ることが出来ないのだから。

眠るひつ……。

このまま眠つて、ずっと目が覚めることがなかつたら、楽なのに。こんな暗闇なんだから、おんなじことだ。

でも。

俺がここでいなくなつたら、美裕、悲しむかな。美裕……。どうしているかな。

怪我が無かつた、つて聞いたから大丈夫だよな。助けたんだから、絶対、幸せになれよな。

俺が美裕と約束したのに、出来そうになくなつて、ごめんな。

美裕……。

いや、もう、いいんだよ。

美裕……。

美裕の、俺に向けてくれるかわいい笑顔が暗闇の中に浮かぶ。なんだろう。この気持ちは。

俺、また、なにかにすがりたいって、思つてる。

あの時と同じように、まだこの世界にいたい。

その、すがりたいっていう存在があるから、まだいたい。例え、世界の全てを失つてしまつても、その人がいるから、まだ

ここにいたい。

そのすがりたいって、思う人が……。

「大樹……」

ふと、声が聞こえた。

柔らかく、やさしい、女の子の声。
この声だけは、忘れる事はない。

「……美裕？」

「うん……」

いつのまにか、俺の部屋に美裕がいたらしい。
静かな部屋に、美裕の息づかい、美裕の匂い。美裕の着てている服
の擦れる音がかすかに聞こえる。

美裕がここいるつて、暗闇の中でも感じられた。
なんだか、嬉しかった。

「美裕。大丈夫だつたんだつてな。よかつたよ。彼氏としては彼女
を助けられなくて、怪我なんてさせたらかっこ悪いもんな」

「……大樹」

いつもの美裕の声より張りがない。かすれた、小さな声。
この声は……。

「なんだよ、泣きそうな声をしてさ。まあ、俺、怪我しちやつたけ
ど、美裕のせいじゃないからな。俺が勝手にこけただけだから。気
にしたら俺、怒るぞ」

「大樹……」

「な、ほら、そんな声を出すのはやめろ。せつかく助けたのにそん
な声を出しては助けた甲斐がない」

「大樹、大樹……」

「だから、そんな声、だすなつて……。美裕？」
俺の身体が、暖かいものに包まれた。
女の子の……美裕のいい香りがする。

「美裕？」

「大樹……。そんなに、一人で辛くなろうとしないで……」

俺の背中に回された美裕の手が、ぎゅっと俺を抱きしめる。

「俺……。辛くなんて、な……」

突然、俺の口が何か柔らかいもので塞がれた。

「み、美裕……」

「我慢、しないでよ……。わたしがここにいるからって……」

「美裕……」

「大樹、辛かつたらわたしに何でも言つてよ。一人でそんなふうに閉じ込めようとしてないでよ！大樹が辛そうにしているの見るの、すごく嫌だよ！」

「美裕……」

「大樹……大樹が辛そうにしているの、聞いたやつた」

「美裕……」

「それなのに、わたしがいることを知つて、こんな優しいこと言つて……。ほんと、馬鹿だよ、大樹……」

「聞かれちゃつたか……。かつこ悪いな、俺」

「……。大樹……ごめんね……。わたしのせいだ目が」

「だから、美裕は悪くないんだって。これは俺のドジでしたことだから」

「大樹……」

「でも可笑しいよな。これから生活に支障がでるとか、絵が描けなくなるなんてこととかより、美裕を見ることが出来なくなるってことを知つて、俺、死にたい気持ちになつたよ。こんなにかつこわる俺のことをこんなにも想つてくれる美裕に、これから俺は何にもできそうにないんだもんな……」

「大樹、大樹……」

「だから、美裕。お前は俺のことをそんなに思つてくれることはないんだぞ。うれしいけどさ。そうしてくれる美裕に俺はこれから何にもこたえてあげることができないんだから」

「わたし、わたし……」

頬にあたる彼女の髪の毛からいにおいがしてくる……。

俺の胸に顔をうずめているよつだ。

「美裕？」

「あのね、大樹……。わたしの話を訊いて」

「美裕……」

「わたしがね……」お母さんの実家の家に戻ってきたのは、お父さんが病気で亡くなってしまったからなの」

「ううん……。たぶん、大樹は気がついていたんだよね。わたしに両親がいなってことを。わたしがわたしにお父さんがいなってことをそれとなく言つても、大樹は訊いたりしなかつた」

「そうしたら、もしかして大樹も、わたしと同じなんじゃないかなって思つて……。そして同じ辛さを知つているんだつてことを知つて。でも大樹はそんなことをわたしにわからないように毎日振舞つていた」

「ああ」

「大樹はいつもわたしのした事に喜んでくれて。大樹もわたしにすぐ優しくしてくれて。だからね、わたし、大樹といつしょにいるときは、そんな辛さを考えないようにする」ことが出来たの。そして、わたしのこれから生きがいが出来たって、思えたんだ」

「生きがい？」

「うん。大樹といつしょにいて。大樹がわたしのすることに喜んでくれる」と

「美裕……」

「わたし……。大樹と出会えていなかつたら、きっと辛くて逃げてしまつたかもしれない。本当は、お父さんがいなくなつたとき、もうなにもかも嫌になつて……自殺していたかもしれないなかつた」

「美裕……」

「でも、最後に、この街に戻つてきて、お母さんとお父さんのこと考えてからにしようと思つたの。そんなとき……。あなたと、大

樹と出会えた

「だからね。大樹は、わたしの恩人なんだよ。それも、今度で2回目の……」

「だから……、大樹。そんなふつに自分が辛くなろうとしないで。わたしにもその辛さを分けて。わたし、今度は大樹ことを助けたいの！もつと大樹を受け止めたいの！……わたし、大樹と、いっしょにいたいの……」

「美裕……」

「だから……大樹。そんな辛いこと言わないで……わたしに、なんでも言つてよ……」

「……美裕。……美裕は今、ここにいるんだよな」

「うん。わたし、大樹のそばにいるよ。大樹を抱きしめてる」

「ああ。俺も美裕の身体を感じる……。暖かい美裕を感じる……」

「うん……」

「美裕……。俺、一つだけお願いをしていいかな……」

「うん……」

「もう一度、美裕の綺麗な瞳を見てみたいな……」

「ぐすつ……。大樹……。それじゃ、わたしが……。あなたの瞳になつてあげる……」

「俺の、瞳？」

「わたしがずっとあなたのそばにいて、あなたの瞳になつてあげるから……」

「美裕……」

「だから大樹……。わたしを感じて……」

再び、俺の唇に柔らかいものが触れる。

美裕の、唇……。

俺は美裕の頭を抱きしめてみた。

柔らかい髪。暖かな体。

美裕は、「……」。

「美裕……」

「大樹……」

唇が離れた。でも、そばに美裕の吐息を感じる。きっと、美裕は今、俺の目の前で、俺を見つめてくれているのだろう。

あの吸い込まれそうな緑色の綺麗な瞳で……。

暗闇の中に……美裕の顔が見えたような気がした。

「美裕……」。ありがとう。俺、今美裕の顔が見えたような気がした

「大樹……」。もつと、わたしを感じて……。そして、わたしをみて

「美裕……」

するすると、布の擦れる音が聞こえる。

「ほら……。わたしの暖かさを感じて……」

美裕の体が、俺の体にそつとくっついてきた。

「ねえ……。わたしの音……聞こえる?」

とくん、とくん、とくん……。

美裕の柔らかい体から鼓動が聞こえていた。

「美裕……」

そこにいる美裕の体を抱きしめる。

「うん……。大樹。あなたの音も聞こえるよ」

美裕はベッドに半身を起こして、俺をまたぐよつに立ちひざでいたみたいだつた。

美裕は……。

きっと、今、美裕はものすごく綺麗なんだうな。

こんな美裕が、俺のことを本当に心から想つてくれている。

俺……。

「美裕……。俺、美裕に甘えて……、美裕を貰つて、いいのか?」

「わたしは、大樹の瞳だから……。大樹の為ならなんでもしてあげるから……」

「美裕……。ありがとう」

「うん……」

「わたし、女の子で……よかつた。大樹を愛していられるんだもの」
「美裕……。ありがとう。俺も美裕のこと、大好きだ。愛している」

「大樹……。うん」

「美裕……」

「んつ……」

俺には美裕がいる。

例え俺が光を失つて、全てを見ることができなくなつても、美裕
がいてくれるだけで、これからも生きていけると思う。
だって、それが俺たちのこれから幸せになるのだから。

それぞれの未来

最初は怖かった。

前を歩くときも、前に何があるんじやないかって。
ぶつかって、躓いて、転んでしまうんじやないかって。

見えないことに嫌気が差して荒れてしまつたこともあつた。

でも、いつも俺のそばには美裕がいてくれた。

俺を助けてくれた。

俺を励ましてくれた。

甘えさせてくれた。

たくさん、たくさん優しさをもらひえた。

何もない俺に。

弱い俺に。

いつもずっとそばにいてくれた。

そして、いつも。ずっと。ずっと。……。
俺に愛を注いでくれていた。

「それじゃ、これは？」

「えっと、私は……あなたを……、愛しています」

「はい、よくできました。それじゃ、『」褒美』

美裕の柔らかな唇が俺の唇に触れる。

「ん。美裕……。でもこんな恥ずかしい文章はもう勘弁してよ
くすつ。それじゃ、今度はこれ」

「ん、えっと……。私も、あなたを、愛しています。つて、美裕」

「うん。これはわたしから。はい、『」褒美。んつ」

「もう、美裕……。恥ずかしいって」

「くすつ。でも大樹はすゞいね。もう^およ^うも^うんなにすらすら読めるようになつて」

「なんの。美裕が色々教えてくれるし、『」褒美もあるから」

「くすつ。もう、大樹は」

俺の目が見えなくなつて、もう数年が過ぎていた。

俺は美裕の姿を見ることはできなくなつてしまつたけれど。

俺のそばには、大好きな美裕がいてくれる。

美裕の姿を見られないことなんて、それはもう俺にとつて、些細な不満にしか過ぎない。

美裕が俺に優しくしてくれて。

俺のことだけを見てくれて。

俺が声をかければ、そこに必ず美裕がいる。

大好きな、美裕が。

でも、いつもこうして、俺に尽くしてくれる美裕に、何もしてあげられないことが、とても切なかつた。

「なあ、美裕」

「なに?」

「俺、いつも思うんだけどさ、いつも俺のためにこうして尽くしてくれて。美裕は大変じゃないのか?」

「大丈夫だよ」

「でも。俺。美裕に何もしてやれなくて。いつも苦労させてしまつ

て……。好きな女の子に俺もいろんなことしてあげたい。男として、愛している女の子を幸せにさせてあげたいんだ。色々出かけたり。買い物したり。映画を見に行つたり……女の子が喜ぶことをさせてあげたい」

「……ねえ、大樹。約束したこと、憶えてる?」

「約束?」

「うん。大樹はわたしに約束してくれたもの」

「どんな?」

「大樹はわたしを幸せにしてくれるって」

「でも」

「わたしはいま、幸せだよ。だつて……」

「大樹は、わたしを、心から見てくれてる。想つてくれてる。こうして、すつごく大事にしてくれてる。大好きな人が、わたしを、本当に心から想つてくれてる。それが幸せでないなんてことは、絶対無いんだよ」

「美裕……」

「だから、わたし。ほんとうに、すつぐく幸せだよ」

「そして、大樹。私を幸せにしてくれて、ありがとう」

言葉が、出てこない。

ただ見えない瞳から、涙が出てきていた。

「……ねえ、大樹。今日はあの公園に行つてみない?」

「公園?」

「今日はね、雪が降つているんだよ」

「へえ……。雪か。もう冬になつていたんだな」

「うん。今ふとね、あのとき、一人で行けなかつたから、行きたいなつて、ちょっとと思つたの」

「そうだな……」

「それでね、わたし、あの絵のマフラーと帽子をしていくね」

「えつ?」

「あの公園はね、わたしのお父さんがあの絵を描いたところなの。あの公園は、今のような雪の降る日に、わたしのお母さんと出会つた場所だからつて。それで、わたし、大樹に会う前に、あの公園に毎日行つていたんだよ」

「そうだつたのか……」

「それでね、このマフラーと帽子はお母さんのものだつたらしいの。それをつけて、大樹といつしょに歩きたい」

「美裕……」

「だめ、かな……」

昔見た、あの絵を思いだす。

心に残つた情景が、思い浮かぶ。

「きっと、美裕はあの絵に負けないほど綺麗なんだううな

「大樹……」

「よし、行こう。見えなくても、俺には心の瞳がある! そんな綺麗な美裕なら、心でも見える!」

「くすつ……。大樹……。うん」

「それじゃ、美裕、行こう」

「うん。それじゃ、ちょっと待つていてね。用意してくる

「おう」

あの公園か……。

そういえば胡太郎、今どうしているかな。

何度か見舞いに来てくれたけど、胡太郎も俺の目が見えなくなってしまったのは俺の所為だといって、何度も謝つていたつ……。俺が退院する頃には胡太郎はもう引越ししてしまった後だつた。あれから俺は学校を辞めざるを得なくなり、美裕もあれからずつ俺のそばにいてくれている。俺たちは何にも変わっちゃいない。だから、胡太郎、手紙の一つでもよこせばいいのに。ひやかしでもいいからさ。

「まったく、胡太郎のやつ……」

そう独り言を呟いていたら、たたたたた……と、美裕がかけてくる音が聞こえてきた。

「大樹！大樹！」

「えつ？どうしたんだ、美裕」

「吾妻君から、吾妻君から手紙が！」

「えつ？」

「それが、吾妻君……」

「美裕、おちついて」

「う、うん……」

「手紙はなんて書かれていたんだ？」

「あのね、それがね……」

「くすっ。大樹のサングラス姿もだいぶさまになつて来たね」

「そつか？俺かつこいいか？」

「うん。すごくかつこいいよ」

「そつか。そつか」

「くすっ。大樹、かわいい」

「……美裕は今どんな格好かな」

「わたし？」

「ああ」

「あのときしようつて言つてたあのマフラーと帽子をしているよ
「えつ？」

「わたしもだいぶ髪の毛が長くなつてきたし……、もうすこつとだけ
け若かつたらあの絵と同じになるよ」

「あはは。美裕はまだ全然若いじゃないか」

「でも、もうわたし学生じゃないし……」

「そつか。もうあれからだいぶ経つものな」

「うん。でも、大樹がわたしを見られるようになれば、きっとこの姿
を見たいなつて言つたから、恥ずかしいけれど、このかつ
こ」

「そつか……。俺、やつと、また美裕を見られるのかもしれないん
だよな」

「うん」

「あはは。それにしても、胡太郎はやつぱりすこいやつだったな」

「うん……」

「美裕、心配なのか？」

「ううん……。大樹の目が治れば、すこく嬉しいな……って、思つ
て」

「美裕とも色々な話になつたもんな」

「うん……」

「目が治つたら、俺、美裕に何かしてあげるからな。今までずっと俺に優しくしてくれた分、何倍もにして」

「うん……」

「それと……。俺、思う存分美裕を見るから、覚悟しておいてな

「くすっ……。うん

「くすっ……」

「そして?」

「また、俺、美裕を描きたい。あの絵に負けないほど、あの姿をした、大好きな美裕を」

「くすっ……。うん。がんばってねー。」

「ああー。」

『森村夫妻へ

久しぶり。元気だろうか。

いや、元気だな。結婚して毎日ラブラブな夫婦をしている一人だ
ものな。

つと、こんな冷やかしをしようと思つて、こんなに久しぶりな連
絡をしたわけじゃないんだ。

今までに色々手紙を送つてくれて、返事が出せずに申し訳ない。
いろいろやつていて、手紙を出す余裕が出来なかつたんだ。許し
て欲しい。

それで、突然だけど、俺、医師になった。

それで、俺、最近失明治療の画期的な方法をみ出せた。それで、
大樹。お前の目も治せるかもしれないんだ。

いや、大樹の目を俺に治させて欲しい。

俺はあれからずっと勉強して、いまようやくお前達に恩を返せる
時がきたんだ。

だから、是非、俺のいる病院に来て欲しい。

そして、親友。また昔のようにたくさん話をしようじゃないか。

おもいつきり冷やかしてやりたいしな。

なんてな。でも、いつでも来てくれよ。いや、早い方がいいな。

手紙を届いたらすぐにだ。

それじゃ、久しぶりの再会を祈つて。

『吾妻胡太郎』

心の情景を最後まで読んで頂きましたので、本当にありがとうございました。
す。

もしよろしければ、評価、感想、意見、指摘などよろしくお願ひい
たします。

この小説から、どのようにして頂けたかとお聞かせください。
頂けたら、すぐ幸せです。どうよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112f/>

心の情景

2010年10月8日14時04分発行